東京帝國大學圖書之印

正教會史

17-315

緒言

原書ハ露國聖務會院ノ大監司（オベルプロクロル）コンスタンティン、ペトロウチ（ポベドノスツェフ）氏ノ著ハス所ニシテ、聖使徒保羅（パウエル）ガ最後ニ羅馬（ロマ）ニ到リシ時ニ筆ヲ起シ、基督（ハリストス）教會ガ內外ノ千難萬苦ヲ排除シ、駸々トシテ進歩スルノ間、一方ニハ東西兩教會確執ヲ生シテ兩教會分裂ノ端ヲ開キ、一方ニハ正教露西亞（ロシヤ）ニ傳ハルノ時ニ至ルマデノ教會史ヲ叙述セシモノナリ

著者ハ聖神降臨後ノ使徒時代ノ教會史ハ之ガ實見實歴者タル使徒ノ筆ニ成レル使徒行傳ニ詳カナルヲ以テ更ニ蛇足ヲ加フルノ要ナシトシ別ニ序ヲ追フテ書中ノ要領ヲ摘

記シ之ヲ卷首ニ掲ゲタリ

著者ハ更ニ正教會ノ近世史ヲ編纂シ本書ノ後篇トシテ出版スルヲ約シタレバ其書ノ出ツルヲ待テ之ヲ譯出シ以テ完璧ト爲スベシ

明治廿六年六月

瑪特斐 上田將謹識

基督正教會史目次

聖使徒行傳の要領……一頁

第一 羅馬……三十六

異教社會の狀態　基督教弘布の効用　最初の窘逐　首座の聖使徒ペトル及パウエル

第二 聖使徒……四十九

使徒の信經　使徒イアコフ、マトフェイ、マルク、ルカ、アンドレイ、神學者イヲアン

第三 使徒の徒……六十四

ツルナワ　クリメント　イグナテイ　ポリカルプ

第四 イエルサリムの滅亡……八十一

第五 異教との鬪爭……八十八

正教辨護者　致命者聖イウスティン　オリゲン　テルトリアン

第六　初代教會の聖堂及奉神禮・・・・・・・・・百一
聖堂　洞窟　奉神禮　機密の晩餐　祈禱文　齋期及祭日　施濟　逝世者の嘉矢

第七　窘逐、聖致命者及致命女・・・・・・・・・百廿一
デオクリティアンの時の大窘逐　致命者ペルペトヤ、ヘリチタタ、ゲオルギイ、セヴスティアン、ボタミエナ、ゲ子ス、アナスタシヤ、ヴルヴラ　基督教を窘逐せし皇帝

第八　コンスタンティン大帝・・・・・・・・・百四十一
コンスタンティンの履歴及其の教に歸すること　信教容忍の詔勅　コンスタンティノポルの創設　東西教會の狀態

第九　第一全地公會・・・・・・・・・百五十三
アリイの異端　ニケヤ公會の召集　アファナシイの辨論　ニケヤの信經

第十　コンスタンティン帝の治世の續き・・・百六十六
聖后エレナ　聖十字架の發見及之を擁くること　聖ニナ、イヴェリヤ及其他の地方を教化すること　コンスタンティンの領洗及崩御　聖アファナシイに對するの窘逐及アリイ黨の跋扈

第十一　コンスタンティンの諸皇子・・・・・・百七十九
聖アファナシイに對する再度の窘逐　アファナシイ曠野に隱遁すること

第十二　修道・・・・・・・・・百八十九
修道の創立者聖アントニイ　曠野に於ける修道院　聚居修院の創立者大パホミイ　聖イラリヤン　西方に於ける修道の嘉矢

第十三　大ワシリイ幷に神學者グリゴリイの幼時・・・・・・・・・二百〇五
彼等の教育及友誼　グリゴリイの母聖ノンナ　二人の雅

典に於ける生活及隱遁

第十四　背教者ユリアン……二百十六

ユリアンの即位　ユリアン異教徒を保護し基督教徒を窘逐する事　聖アファナシイに對するの窘逐　イエルサリム聖殿恢復の効なき事　波斯に軍を出す事并にユリアンの崩御　アファナシイの逝世

第十五　聖大バシリイ及神學者聖グリゴリイ……二百廿九

ケサリヤの主教バシリイ　アリイ黨の保護者たる皇帝バレント　バシリイに對するの窘逐及バシリイとアリイ黨との鬪爭　聖バシリイの著述　グリゴリイ、コンスタンティノポルに至る　アナスタシイの聖堂に於ける説教　皇帝フェオドシイの事　コンスタンティノポルより第二全地公會を開設する事　聖グリゴリイの著述

第十六　金口聖イオアン……二百六十

イオアンが母アンフーサの教育を受くる事　イオアンの隱遁及神品職を受くる事　アンティオヒヤに於ける説教　コンスタンティノポルの教座に招がるる事　奉神禮及唱歌を整ふる事及雄辯を振ふ事　皇后エウドクシヤのイオアンに對する窘逐　イオアンの位を黜けらるゝ事其流竄及び赦免　再度の窘逐并に流罪に處せられ苦を受け死する事

第十七　第三第四第五第六全地公會……二百九十三

異端者ネストリイに對するエフェスの第三全地公會　アレキサンドリヤの聖キリール　エウティヒイの異端　エフェスに於ける暴逆の集會　ハルキドンの第四全地公會　ユスティニアン皇帝の時の第五全地公會　クリトの聖アンドレイ

第十八　西教會の諸父……三百〇八

メディオランの聖アムウロシイ　アムウロシイが皇帝フェオドシイを諫むる事　福アウグスティンと其母モニカ　アウグスティンの幼時放縱なる事及び母の祈禱と愛によりて基

第十九　「マホメット」教……三百四十二

基教に歸する事　アウゲスティンの主教職　福イエロニム　イエロニムのパレスティナに於ける修道并に其の聖書の翻譯

第二十　聖像廢毀の爭亂并に第七全地公會……三百四十九

カリファトの創設及征服

レオ帝聖像に對する窘迫　ダマスクのイチアン女帝　イリナ聖像崇拜を回復する事并に第七全地公會を開設する事　ダマスクのイチアン感動すべき歌を作る事　マイウムのコスマ、カッシヤ、詠歌者ロマンの事

第廿一　西羅馬帝國の滅亡并に基督教が新に興りたる諸國に播傳する事……三百六十六

蠻夷の侵攻并に羅馬の暴掠に遭ふ事　東西教會の間に於ける差異　新に興りたるの國々及基督教が羅馬よりして之に傳ハる事　佛蘭西　統利頓　日耳曼

第廿二　「パパ」の權勢の揚る事及教會分裂の發端……三百八十五

パパの權勢の揚りたる理由　コンスタンティノポルのパトリアルフ、フォテイの時教會分裂の端を開く事　基督正教のスラウヤン人に傳ハる事

基督正教會史

第一章　聖使徒行傳の要領

主耶蘇基督の命令。

耶蘇使徒に命じて曰く爾等イエルサリムを離れずして父の約せし所のものを待て盡しイヲアンは水を以て洗禮を施したれども爾等は今より後未しからずして聖神によりて洗禮を受けん（四、五節）

主の昇天

耶蘇使徒に問て曰く爾等イエルサリム猶太全國、サマリヤ及び地の極までに我が證を爲すべしと。此事を言ひ畢りて彼等の觀るが間に擧げ

られ雲之を接けて見えざらしめたり(八、九節)
諸使徒祈禱を爲し約束の成るを求む。
使徒の職よ新使徒を選びマトヒイ其闕よ當る。

第二章

五旬節。
聖神使徒に降臨す。俄よ天より迅風の如き響ありて焰の如き岐舌現ゝれて彼等各人の上に止る。是よ於て彼等ゝ皆聖神に滿たされ其聖神の言ゝしむるよ隨ひて異なる諸國の方言を言ひ始めたり(二、三、四節)
人民大よ騷動す。
ペトル衆人の目擊する事件を明示するの預言を列擧し終りに臨み民よ悔改を勸めて曰く爾等各悔改して罪の赦を得んが爲よ耶蘇基督の名よ託りて洗禮を受けよ、然らば爾等聖神の賜を受くべし。蓋し此約束ゝ爾等及び爾等の子孫と凡ての遠人即ち主たる我等の神よ召さるゝ者よ屬するなり(三十八、三十九節)
民大よ感動し此日洗禮を受けたる者凡そ三万人あり。信者ゝ相愛祈禱し救ゝるゝ者日に敎會に加ゝれり。

第三章

使徒始めて奇蹟を行ひ生來なる跛者を醫す
民驚愕す。
ペトル復た民よ向ひ諭して曰く爾等何故よ此事を奇とするや爾等何ぞ我等が己の能若くゝ己の德を以て此人を行ましゝが如くして我等よ目を注ぐや耶蘇の名ゝ其名を信ずるよ由りて爾等が見る所識る所の此人を健かよせり如斯耶蘇に由れる信仰ゝ爾等衆人の前よ於て此人を全く愈したりと云ひ而して後復た彼の識らざして基督を十字架

に釘せし者よ悔改すべきを勸めて曰く神既に其子基督を起し爾等各人を其惡より引反し爾等を祝福せんが爲め先づ爾等よ彼を遣いせり。是故よ爾等悔改轉移して其罪の抹さるゝことを爲よ然らば主の前よりして安舒日來らん(十二、十六、十九、二十、廿六節)

第四章

「サドケイ」人嫉惡憤懣す。

諸使徒獄に幽へらる。

祭司長アンナ及カイアファ并よ其他の人々諸使徒を呼出して其の何の權を以て奇蹟を行ふやを白狀せしめんとす。

ペトル聖神よ感じ答へて曰く爾等とイズライリの民と皆知るべし爾等が十字架に釘して神の甦らせし所のナザレトの耶蘇基督の名に由りて此人健かよなることを得て爾等の前に立つ(十節)

祭司長等卑賤無學の人々の勇敢なるよ惑ひ且其公然行ひたる奇蹟を反駁するよ由なく使徒に耶蘇の名を敎ふるを禁じ之を恐喝して放たんと決議す。

時にペトル及イヲアンい心を合せ神よ對ひ聲を揚げて曰く主よ爾い天と地と海と其中の萬物を造り給ひし神なり。主よ今彼等の恐喝を見爾の僕よ臆するおとなく爾の言を宣ぶることを得させよ(二十四、二十九節)

民多く之を信じ信者皆心を一よし意を一よせり。

第五章

使徒ペトルアナニヤ及びサプフィラの詐僞を面責す。神の罰之に及ぶ。

諸使徒尙奇蹟を行ひ病を醫し民之を讃揚す。

祭司長及び「サドケイ」人の嫉惡益々募り諸使徒其命よ由りて獄よ幽へ

らる。夜半神の使彼等を獄中より出して曰く往て殿に立ち此生命の言を以て民に語れ(二十節)

議會の人々い幽囚れたるの使徒が獄を脱し聖殿ゑ在りて傳敎すると聞き驚愕憤怒す。

諸使徒議會の前ゑ曳出さる。

祭司長が我等此名によりて敎ふる勿れと嚴禁せしゑあらぜやといふの問ゑ對しペトルを始め諸使徒侃々たる答を爲せしが爲め議會の人人の激昂甚しく之を殺さんと謀る。

時ゑ有名の敎法師ガマリイル明論を吐き議會の人々をして使徒に手を措くの決心を翻さしむ。

諸使徒欣然として主耶蘇の爲ゑ笞たるゝの辱を忍び受く。

議會い基督の名を傳ふる事を禁じて使徒を放免せしに彼等公然神の

道を傳へて信者の數益增加す。

第六章

エルリン人諸使徒が日々行ふ所の施濟の配布ゑ不滿を懷く。

諸使徒補祭七人を立てゝ此職に任じ自ら專ら祈禱傳道を務めんと決定す。

是に於てステファン フィリプ其他五人を按手して補祭と爲す。

ステファンい傳敎の力ゑ由り多くの人をして感動せしめ祭司も多く信仰の道ゑ順へり(七節)

僞證者彼を訴へて神を謗る者と爲す。

ステファン議會の前ゑ立つ。議會に座する者皆目を注て彼を見しに其面神使の面の如くなりき(十五節)

第七章

ステファン演説す。

ステファン此著名の演説に於て舊約歴史の全般を神のアウラアムよ約せし時より序を追ふて着々陳述し預言者の言を擧げて舊約ゝイズライリ人の受くるを欲せざる新約を受けしむるの準備を爲せしものなるを證し終りよ臨み大にイズライリ人を責めて曰く強頑よして心と耳とよ割禮を受けざる者よ爾等常に聖神よ逆ひ爾等の先祖の如く爾等も行ふなり爾等の先祖ゝ孰の預言者をか窘迫せざりし彼等ゝ義者の來らんことを預言せし者を殺し爾等ゝ今その義者を解し且つ之を殺せり(五十一、五十二節)

議會の人々ゝステファンの説を聞くよ隨ひ益〻其怒を激せしがステファン聖神に充たされ天を仰ぎて看よ我天開けて人の子の神の右よ立つを見る(五十六節)と云ふや皆大よ怒りてステファンを捕ひ之を殺さんとて

城外よ曳き出し之を石擊せり。ステファン跪き大聲に呼んで曰く主よ是罪を彼等よ負ゝしむる勿れと言ひ畢りて寢れり。

第八章

一少年サウルと稱ふる者此よ立てり。サウル彼の殺されしを好とせり(一節)

イエルサリム教會よ窘逐起る。

使徒イエルサリムよ居り其の門徒猶太サマリヤを遍歴して傳教す。

フィリプサマリヤよ傳道す。此邑よ大なる喜あり(八節)

神使フィリプよガザに行くの路に向ふべきを諭す。

フィリプ寺人の車よ乘り預言者イサイヤの書を讀みつゝ疑を懷く者よ遇ひ聖神の示よ從ひ其車よ近づき口を啓き其錄されたる所よ基づき

寺人ゝ我耶蘇基督の神の子たると信ずと云ひ其信を表して洗禮を受けんと欲するの望を表す
寺人洗禮を受く。

第九章

サウル猶厲言と殺氣を吐きて主の門徒を攻め(一節)祭司長ゝ往きて當時基督教を奉ずる者の多く居りしダマスク府ゝ行きて之を窘逐するの許を請へり。彼行きてダマスクゝ近づける時、忽ち天より光ありて彼を環照せり。彼地ゝ仆れしゝ、サウルサウル爾ゝ何ゆゑ我を窘迫するや、といふの聲を聞けり。サウル曰く主ゝ爾ゝ誰ぞ。主曰く我ゝ爾が窘迫する所の耶蘇なり。爾刺ある鞭を蹴るゝ難し。サウル戰き駭きて曰く主ゝ爾ゝ我ゝ何を爲さしめんと爲給ふや。主之ゝ謂て曰く起て市ゝ入れ、さらば爾の爲すべき事を示さるべし(三、四、五、六節)

サウル光を見て明を失ひ人ゝ導かれてダマスクゝ入る。
主アナニヤに現れサウルを愈すを命ず。
アナニヤ驚き詰問し遂ゝサウルを愈す。乃ち手を其上ゝ按して曰く兄弟サウルよ爾の來れる路ゝて現れし所の主耶蘇ゝ我を遣ゝし爾をして再び見る事を得且つ聖神に滿されしめんとすと。忽ち鱗の如きもの其目より脱して再び見ることを得即ち起て洗禮を受く(十七、十八節)
サウル始めてダマスクゝ於て傳道す即ち會堂ゝ於て耶蘇の事を宣べ其の神の子たるを證す(二十節)
猶太人且疑ひ且驚き遂ゝサウルを惡みて之を殺さんと謀る。
サウルイエルサリムに到る。
諸使徒サウルゝ遇ふて且疑ひ且驚く。ワルナワ諸使徒ゝサウルに遭遇したるの事情を述ぶ。彼イエルサリムゝ在りて門徒等と往來し侃々と

サウル光を見て明を失ひ人に導かれてダマスクに入る。

主アテニヤに現われサウルを愈すを命ず。

アテニヤ驚き詰問し遂にサウルを愈す乃ち手を其上に按して曰く兄弟サウルよ爾の來れる路にて現われし所の主耶蘇わ我を遣はし爾をして再び見る事を得且つ聖神に滿されしめんとすと忽ち鱗の如きもの其目より脱して再び見ることを得即ち起て洗禮を受く(十七、十八節)

サウル始めてダマスクに於て傳道す即ち會堂に於て耶蘇の事を宣べ猶太人且疑ひ且驚き遂にサウルを惡みて之を殺さんと謀る。

サウルイエルサリムに到る。

諸使徒サウルに遇ふて且疑ひ且驚く。バルナバ諸使徒に向サウルに遭遇しかるの事情を述ぶ彼サウルは在りて門徒等と往來し恐れ

して主耶蘇の名を傳ふ(二十八節)

教會ハ猶太ガリレヤ及サマリヤヨ蔓延す

ペトルリダ府ヨ於て癲癇者を愈しイオピヤに於て處女タウヒを蘇生す。

第十章

羅馬の百夫長コルニリイ異象を見る。即ち彼異象に於て明ヨ神の使の己ヨ來るを見る曰くコルニリイよ爾の祈禱と爾の施濟ハ已ヨ上りて神の前ヨ記されたり。今人を遣ハしてペトルと名づくるのシモンを召べ彼ハ爾と爾の全家の救を得べき道を以て爾ヨ告げん(三、四、五、六節)

ペトル三次奥妙なる異象を見る。

コルニリイの使者イオピヤに到る。

ペトル聖神の勸めヨ從ひ其使者と偕ヨケサリヤに行く。

コルニリイ家人と俱ヨ出でゝペトルを迎ふ。ペトル之に謂て曰く猶太人が異邦人と交り又近づく事の宜しからざるハ爾等の知る所なり。されど神ハ何れの人をも穢れたるもの或ハ潔からざるものと言ふ勿れと我ヨ示し給へり何の國民にても神を敬ひ義を行ふ者ハ彼ヨ悅ばるゝなり(二十八、三十五節)

ペトルの傳道を聞きて信せし者ヨ聖神降る。

彼等皆耶蘇基督の名に由りて領洗す。

ペトルと偕ヨ來れる猶太人ハ聖神の賜異邦人ヨも降るを見て大ヨ惑ふ。

第十一章

ペトルイエルサリムに皈るヨ及び使徒等其の異邦人と交際したるを譴責す。

ペトルは之を奥妙なる異象に於て天より聲ありて神の潔うせし所の者爾之を不潔と爲す勿れと告られたる事、神使のコルニリイに現れたる事、異邦人の信者に聖神の賜の降りたる事を告げたり。彼等此を聞きて對ふる所なし乃ち神を讃揚げて曰く是れ則ち神は異邦人にも生を得させんとて之に悔改を賜ふなり(十八節)

ワルナワアンティオヒヤに遣はされて教を傳ふ是に於て主に歸する者多し(廿四節)

サウル亦アンティオヒヤに至る。二使徒一年餘アンティオヒヤ教會にありて教誨す。アンティオヒヤに於て其門弟となれる者始て基督教徒と稱す。

第十二章

使徒に對するの窘逐益々嚴なり。

イアコフ(ヨハネの兄弟)はイロド王(サウルレエムに於て小兒たる殺したるイロドの孫)の命に由りて殺さ

れペトルは獄に繋がれ其死刑の日已に定めらる。

其前夜神使ペトルに現はれる。主の使旁に立ち獄中に光輝く…。彼ペトルを醒す…。ペトル乃ち之に從つて出づ。

第一及第二の守所を過ぎて城に入る所の鐵門に至りしに其門自ら彼等の爲に啓けり(十節)

此夜諸使徒相集りて熱心にペトルの爲に祈禱せり。

時にペトル俄かに其前に立ち主が使者を遣はしてイロドの手を遁れしめ給へるを語るを聞きて喜び且驚けり。

イロド怒り遂に間もなく非命の死を遂げたり是に由りて神の道興り且廣まれり(廿四節)

第十三章

ワルナワ及びサウルは神の默示によりて大任を托せらる聖神曰く我

が爲にワルナワとサウルを甄別ちて我が彼等に命せし所の事を行わしめよと(二節)

二人按手の禮を受く。

サウル此時始めてパウエルの名と以て傳道に着手す。

クリト島に敎を傳ふ。

方伯セルギイパウエル敎に歸す。

巫者エリマ之を妨げて罰せらる。

ワルナワ及パウエルピシディヤのアンティオヒヤに至る。此日安息日なるを以て彼等直に會堂に入る

奉事終りて后會堂の宰人をして之に言わしめて曰く若し民に勸むる言あらば請ふ之を言へ。

パウエル雄辨滔々主耶蘇の事を宣ぶ。曰くされば人々兄弟よ此人に由り

て罪の赦の爾等に傳われるを知れ。爾等がモイセイの律法に依りて義とせらるゝ事能わざる凡ての罪も之を信ずる者わ皆彼に由りて義とせらるゝ也(三十八、三十九節)

猶太人パウエルの言頗る人心を感動するを見て之を嫉み誹謗罵詈を以て之に抵抗す

ワルナワ及びパウエル大に憤り毅然として曰く夫れ神の道わ必ず先づ爾等に告ぐべきなり然れども爾等わ之を棄て且つ自ら永生を得るに當らざる者と爲せり故に我等轉じて異邦人に向ふ(四十六節)

異邦人大に喜び神の道益々蔓延す。

猶太人二使徒を其地方より放逐し二使徒喜悅と聖神とに充てり(五十二節)

第十四章

パウェルリストラに於て奇蹟を行ひ一言を以て生來なる跛者を愈す。民見て駭き聲を揚げて曰く諸神人の形に藉りて我等に臨めり(十一節)民い感謝の意を表せんとし神職を始めとし恰も己の偶像に對するが如く二人の前に献祭を爲さんとせり。

二使徒驚き民を制して曰く人々よ何故に此を行ふや我等も亦爾等と同情を有するの人なり。爾等に福音を傳ふるい爾等をして此虚妄を棄て天と地と海と其中の萬物を造れる活神に歸せしめんが爲なり(十五節)

猶太人アンティオヒヤより至り民を敎唆して使徒に反抗せしむ。民俄に故なくして激怒しパウェルを石擊し既に死せりと爲して城外に曳出せり。

使徒イコニヤ、ベルギヤ、アッタリヤ地方に福音を傳へ各敎會に司祭を立て敎訓を垂れて門徒の心を堅うし之に恒に信仰を守るを勸め且つ多くの艱難を歷て神の國に入るべきを敎ふ(二十二節)

使徒アンティオヒヤに歸り敎會の人を集め神の己を助けて行ひたまへる事と其の異邦人に信仰の門を開き給ひし事を告ぐ(二十七節)

第十五章

基督敎を奉じたる異邦人に割禮を行ひ之にモイセイの法を遵奉せしむべきや否やの疑問猶太人の間に起り此重要の問題を說明し及び決定するが爲め公會を召集するに決す。

始てイエルサリムに公會を開設す。

使徒ペトル立て己首として異邦人を主に歸するの任に選ばれたる事を述ぶ人心を識る神い我等に聖神を賜ひし如く彼等にも之を賜ふて其證を爲し又信仰を以て其心を潔うし我等と彼等の間に分を爲さゝ

りき我等が主耶蘇基督の恩寵に由りて救はるゝこと彼等と異なるなきを信ぜる也(八、九、十一節)

次ゐ使徒イアコフ立て演説し著名の預言を擧げて主云ふ此後我反りて已に傾圮たるダウィドの幕屋を復び起し其破壞の跡を復び造りて之を建つべし是れ其餘民及び凡そ我名を奉ぜる異邦人をして主を尋ねさせんが爲なり(十七、十八節)と云ひ基督教を奉じたる異邦人ゐモイセイの法を守らしめて之を煩ゐす可らざる事を決議し且つ此決議を書して各教會ゐ報道すべき意見を公會に提出す。

公會ゐ使徒イアコフの提出案を採用す。

異邦人の諸兄弟に與ふる公書始めて出づ、此書の終りゐ左の言あり曰く蓋し左の緊要なるもの、ゝ外何をも爾等ゐ負せざるゐ聖神及我等の望む所也即ち偶像に獻せし物と血と勒死たる物と姦淫とを戒むべし。

爾等の欲せざる所ゐ之を人に施す毋れ。爾等若し自ら此を慎まゞ則ち善し(二十八、二十九節)

パウェル、ワルナワ、イウダ及びシラはアンティオヒヤゐ赴き兄弟に書を付す。諸兄弟之を讀みて其慰辞を喜ぶ。

ワルナワ、パウェルと別る。

第十六章

パウェル、シラ及び新門弟テモフェイを携へ小亞細亞に赴きて傳道し一夜異象ゐ於て主よりマケドニヤゐ傳教すべき召を蒙る。

パウェルの一行フィリプ府ゐ至る。

リデヤ教ゐ歸す蓋し主ゐ其心を啓きパウェルの言ふ所ゐ嚮ゐしめたり(十四節)

ト筮を業とする一婢より惡鬼を逐ひたる事ゐ民心動揺の發端となる。

パウェル及びシラ有司の前に曳出さる。
營長の命に由り多く杖たれて後獄に入れられ其足に桎梏を懸けらる。
二使徒終夜祈禱謳歌す。
夜半地大に震ひ諸門啓け械繫盡く脫す。
獄吏驚き戰慄してパウェルとシラの前に俯伏し之を導き外に出して曰く君よ我救を得んが爲に何を爲すべきか彼等曰く主耶蘇基督を信せよ(二十九、三十、三十一節)
此夜獄吏は使徒等を己の家に招き自ら家人と共に洗禮を受く。
營長ハ使徒等が羅馬國人なるを知り恐怖し來り謝してフィリップを去らん事を請ふ。

第十七章

パウェルフェサロニカ及ウェリヤに敎を傳ふ其中多くの人之を信じ又エルリンの貴女及び男子の信じたる者亦少なからざりき(十二節)
猶太人尙止まずして民を煽動しパウェルに反抗せしめパウェル遂にウェリヤを去らざるを得ざるに至る。
パウェル雅典に至る其府擧りて偶像に事ふるを見て甚く心を傷めたり(十六節)
パウェルは日々猶太人の會堂及市場に於て敎を傳ふ。
諸派の哲學者來りて之と討論す。
遂にパウェルを援き集會所に至りて曰く爾異聞を我等の耳に入れしが故に我等其の何事なるを知らんと欲す(二十節)
パウェル集會所の前に立ち當時の文明國人に向ひ熱心雄辯を揮ひて眞神を承認し且つ曰く我途を行くとき爾等が敬拜ふ所の者を見しに『識らざる神に』と題せる一の祭壇を見出せり。我今爾等が識らずして敬ふ

所の者を爾等に告げん。夫れ宇宙と其中の萬物を造れる神ゝ乃ち天地の主にして手にて造れる殿に居らず且つ自ら衆人に生命と呼吸と萬物を予へ物に乏しきことなく人の手よて事へらるゝものに非ず(二十三、二十四、二十五節)

雅典人耳を傾けてパウエルの説を聽きたるも其説を重んぜず死者復生説の如き之を冷評せり。是に於てパウエル彼等の中より出去れり(三十三節)

第十八章

パウエルコリンフに至る。

パウエルアキラ及びプリスキラよ遇ひ之と業を營み天幕と製せり。

パウエルエルリン人及び猶太人よ敎を傳ふ

猶太人パウエルを憎み事毎よ基督の敎を誹謗して止まず。

パウエル之を嚴責して曰く爾等の血は爾等の首よ歸すべし我は尤なし今より後異邦人に適かん(六節)

會堂の宰クリスプ及び其他敎に歸する者多し

猶太人パウエルを捕へて府長ガルリヨンよ訴ふ。ガルリヨン敎法に關する爭論よ關係するを厭ひて其訴を受理ず。

パウエル異象を見る。夜間主異象よ於てパウエルよ語りて曰く懼るゝ勿れ默せずして語るべし蓋し我爾と偕よあれゞ爾を害せんとして責る者なし(九、十節)

パウエルコリンフよ滯在する事一年六ヶ月日夜神の敎を傳ふ。

第十九節

パウエル再びエフェスよ至る。

居ること二年福音を傳ふ且つ奇蹟を行ふ亦少からず。神はパウエルの手

を以て希有の異能を行へり(十一節)
主の道廣まりて勝を得ること此の如し(二十節)
使徒パウルエフェスの教會を堅立して一先づイエルサリムゑ行き而して后羅馬ゑ行かんと決心す。
銀工デミトリイエフェス人を煽動して騒乱を起さしむ。
使徒パウルエフェスを去る。

第二十章

パウルトロアダゑ於て少年エウテヒイを蘇生す。
パウルミリタゑ至りパレスティナゑ向ひ出帆するゑ先だちエフェス教會の長老を招ぎ之と訣別の談話を爲す。
此訣別の談話ゝパウルの基督教會を愛し教會の諸子を慮るの厚きと彼が主耶蘇の名ゑ由りて受けたるの職ゑ欣然其身を犧牲ゑして從事

するの意を表す曰く今我イエルサリムに往く彼處にて遇ふ所若何を知らず惟聖神毎邑ゑ我に示して縲絏と患難我を俟つありと言ふ然れども我ゝ何事をも意と爲さず只欣然として我が路程と主耶蘇より受けし所の職を盡すを得ば我命をも貴しとせず(二十二、二十三、二十四節)
是故ゑ爾等儆醒せよ我三年の間夜も晝も斷えず涙を流して爾等各人ゑ教へしおとを憶ふべし我爾等も是の如く勤勞て柔弱者を扶け且主耶蘇が受くるよりも與ふるゝ福なりといひたまひしを憶ふべきを凡ての事に於て示せる也(三十一、三十五節)
衆人跪きて祈禱し涙を垂れて使徒を船に送る、

第二十一章

途間到る處人皆パウルにイエルサリムゑ往く可らざるを勸む。
預言者アガフ奥妙の預言を爲す。パウル曰く我ゝ我主耶蘇の名の爲に

ゝ第に縛るゝのみならずイエルサリムゝ死するも亦甘ずる所なり(十三節)

是ゝ於て門徒ゝ亦之を止めず、主の旨の如く成らんをといふて止めり(十四節)

パウエルイエルサリムゝ至る。

使徒イアコフ、パウエルをして猶太人と親ましめんとし之ゝモイセイの律法の儀式を遵守すべきを勸む。

猶太人パウエルの聖殿ゝあるを見憤懣激昂し全市擧て喧擾し絶叫してパウエルを執へ之を毆打して刑ゝ處せんとす。

營長パウエルを民の手より救ひ鏈を以て之を繫ぎ曳て營に入らしむ。

パウエル營ゝ入るゝ當り民ゝ向ひて演説するの許を求む。

第二十二章

パウエル階上ゝ立ち民ゝ向ひて手を搖かし其の靜れる時エウレイの方言を以て彼等ゝ語れり(廿一の四十節)曰く請ふ我が今爾等ゝ辨解する所の事を聽け(一節)

パウエル簡單ゝ己の履歷を陳べ自らモイセイの律法と嚴守せし事、殘酷無情に基督の門徒を窘逐せし事、ダマスクに至るの途ゝ於て異象を見豁然大悟し自ら其の曾て窘逐せし耶蘇の名を呼び遂にイエルサリムの聖殿ゝ於て祈禱して恍惚たる時主我ゝ語りて彼等ゝ爾が我ゝついて立つるの證を納れざるが故に速かにイエルサリムを出でよ。往け、我爾を遠く異邦人ゝ遣ゝさんと曰ふを見たり(十八、二十一)といへり。

猶太人怒り叫んでパウエルの言を中絶す。

營長命じてパウエルを鞭たしめんとせしも羅馬國人なるを知りて其刑を廢し議會を召集してパウエルを裁判ゝ曳出す。

第二十三章

パウェル議會を注視して曰く我今日に至るまで良心に由りて神の前に事を行へり我に「ファリセイ」人また「ファリセイ」人の子なり死者の復生を望むに由りて我今審を受く(一、六節)

「ファリセイ」人及び「サドケイ」人之を聞て大に爭論す。

營長に「サドケイ」人がパウェルを寸斷せんとするを恐れ再びパウェルを曳て營に入る。

パウェル異象を見る。主是夜其側に立ちて曰くパウェルよ勇めよ蓋し爾に我に就てイエルサリムに證せし如く亦是の如く羅馬にも證すべけれバなり(十一節)

猶太人にパウェルの營より議會に至るの途にて之を殺さんと密議す。

深夜騎卒及び步兵にパウェルを護送せしめてケサリヤに送り州長フェリクスに引渡す

第二十四章

パウェルを訟ふる者亦ケサリヤに至る。

パウェル州長フェリクスの前に立ちて裁判を受く。

フェリクスパウェルの辨護を聞きて深く感動し決議を遲延す。

唯猶太人の歡を得んが爲め更に二年間パウェルを械繫す。

第二十五章

フェストフェリクスに代て州長と爲る。

猶太の祭司長再びパウェルを裁判せんとしケサリヤよりイエルサリムに移さん事を求む。パウェル曰く我今「ケサリ」の判庭に立ち此に於て審を受くるに當然なり我に猶太人を侮辱せしことなし(十節)

是に於てフェストパウェルを羅馬に送るを決議す曰く爾に「ケサリ」に上告

せんと欲するか宜く「ケサリ」より往くべし(十二節)

王アグリパ及び妃ウェレニカ威儀を正してパウェルを接見す。フェストパウェルの事を告ぐ。是より於て次日アグリパとウェレニカ大に威儀を備へ來りて判庭に入りぬ…パウェルフェストの命に由りて曳出さる(二十三節)

第二十六章

パウェルアグリパ王に見ゆ猶太人の己を窘逐する所以を説明す曰く今我立て我等の先祖等に神の約束し給へし望につきて鞫かるゝ也(六節)次に使徒の職に召さるゝ時見たる所の異象及び默示を告げて曰く我今爾を彼等に遣わして彼等の目を啓き暗を離れて光に就き「サタナ」の權を離れて神に歸せしめ又彼等をして我を信ずるに由りて罪の赦と聖者の中に於て業を受くるを得せしめんとす(十七、十八節)

アグリパ深く意を注ぎてパウェルの説を聞きパウェルに謂て曰く爾我を勸めて幾んと基督教徒たらしめんとす(二十八節)

アグリパ王及び其他パウェルの辨護説を聞きし者皆パウェルが毫も死に當り若くは械繫を受くべき事を行わざるを悟る。

然れどもパウェル既に「ケサリ」の裁判を受けんことを請求めしを以て王われ己の權を以て之を救ふ能わざ。

第二十七章

パウェル他の囚人と偕に百夫長ユリヤに付され伊太利に向ひて發航す。逆風起り怒濤船を覆さんとしてパウェルの同行者大に恐る。

パウェル之を勵し舟中の人一人も亡びざる事を明言す曰く蓋し我が屬する所我が事ふる所の神の使者此夜我が側に立ちてパウェルよ懼るゝ勿れ爾必ず「ケサリ」の前に立たん且つ神われ爾と偕に舟にある者を以て悉く爾に賜へりと曰へり(二十三、二十四節)

第二十八章

舟淺瀬に乘り上ぐ。

舟中の人皆メリト島(一名マリタ島)に上陸して危急を救はる。

島民憐愍厚遇す。

蝮パウェルを刺すも中毒せぞ島民之を神なりと想像す。

パウェルプーブリイ其他多人の病と愈す。島民深く其恩に感ぜ。

パウェル羅馬に至る羅馬の兄弟等我等の事を聞き出でゝ我等を迎ふ…

パウェル之を見て神に謝し其心に力を得たり(十五節)

パウェル他の囚人と別居するを許さる。

パウェル羅馬に居る有名の猶太人を招ぎ之に[ケサリ]の裁判を請求めし所以を説明す。

猶太人親しくパウェルより到る處此の如く爭論を引起したるの教理を

聞かんと欲す。

猶太人其教を信ずる者あり又信ぜぞして去る者あり。

パウェル終りに臨み謂て曰く誠なるかな、聖神預言者イサイヤに託りて我等の先祖に告ぐる所の言。其言に云く爾往き此民に告て曰へ爾等聽けども聰らぞ、視れども見ざらん。蓋し此民の目に見て見、耳にて聽き、心にて悟り、轉移して我に醫されん事を恐れ其心を頑にし耳の聽くに慵く其目を閉ぢたりと是故に爾等知るべし神の救の異邦人に遣はされ彼等の之を聽かん(二十五乃至二十八節)

使徒パウェル二年の間羅馬に在りて公然神の教を傳ふ。凡そ來る者は之を接けたり(三十節)

第一　羅馬

異教社會の狀態。　基督教弘布の効用。　最初の窘逐。

首座の聖使徒ペトル及びパウェル。

基督の使徒が世に出て福音の道を傳ふるや異教社會の幽暗に居る人人に始めて『大なる光』を見眞理と救贖の言を聞けり。當時に羅馬國全盛の時にして四隣の諸國其權下に服したりしが朝野の間共に信仰全く衰へたり。信仰衰ふる時は風俗壞亂して其國滅亡するに至るに必然の勢なり。尤も羅馬帝國の樞要の都會には皆僞神を祭る壯麗の殿あり精巧を極たる神像に到る處に屹立して人民に之を献祭せりと雖も學識あり識見ある者に已に其神を信ぜず而して祭禮奉事の式は一の虚禮

たるに止まり毫も人民の心を慰め其望を充すに足らざりき。然れども人に凡そ信仰なくして居ると能はざるものなれば眞誠の信仰の代りに種々の妄信世に行はれ人に害を爲すもの奥妙なるものを妄信恐怖するよりして行ふ處の儀式呪詛、卜筮、妖術の如き一として羅馬人の間に行はれざるなく此儀式を行ふの神職に自ら之を信ぜざるも民を蠱惑しつゝ力めて之を行ひたり。此の如き狀態なるに拘はらず其宗教を以て國教と爲し政府に之を維持せしが故に偶像に於ける信仰に衰ふるも之が爲め偶像の數に減ぜずして征服せられたる人民が羅馬に携へ來れる僞神の像によて其數益〻增加せり。人民は皇帝に對して奴隷屈從的の恐怖を懷より帝位を簒奪せる暴君を神とし祭りティウェリィ及カリグラを祭るが爲に祭壇を築き其像を立て之に献祭し香を焚くに至れり。而して彼等に之を祭るを以て國家に忠を盡し愛國の情を發表す

るものなりとし之を行わざるを以て國家に不忠のものなりとせり。羅馬人は四隣の民を征服し其財寶を掠め來りたるもの夥しかりしと雖も此財寶わ一も人民を益せず人民の富と爲らずして有司顯官のみ豪富を極め而も尙嬰くを知らず民を壓虐げて更ゑ其富を增さんとし奢侈淫亂風を爲し、奢侈淫亂益々募るゑ從ふて民間に殘忍の風俗行はれ情慾を發動するの觀劇盛んゑ流行せり。奴隷をして相鬪ふて死ゑ至らしめ或わ猛獸の咆哮る間に人間を投じて噬み殺さしむる慘劇及び猥褻見るに忍びざる演劇の如きは最も羅馬人の看るを好む所の者なりき彼等は諸國より引致したる無數の奴隷をして公共の勞を執らしめ又之が主人たる者の家ゑありて勞を執らしめたり。此奴隷輩わ自餘の人々と一般ゑ不死の靈魂を有する人間ゑして其中にわ學識あり技藝ある者も亦少なからざりしゑ彼等は人間と見做されずして物品視

せられ如何なる權理をも有せずして殘忍敗德なる主人の意志に其生殺の權を握られたり。

古代羅馬國の此慘狀を極めたること實に甚くして公義道德廉節わ殆ど全く地を拂へるが如くなりき。羅馬國民中の善良なる者ゑして常に正理公道の事を思念せる哲學者セヰカは當時の國狀を明言して曰く『世わ罪惡汚行にて充たされ此災を脫するの方法あるなし。汚行わ善良神聖なるものを悉く蹂躪し意ゑ任せて跳梁跋扈し既ゑ何人にも隱る事なし。汚行惡逆の破廉恥なると其人心ゑ浸潤するの甚しき潔白無罪は之を求めんとするも決して之を得るゑと能わざるべし』と。

此時ゑ當り猶太人も預言者の書ゑ示されたる「メッシャ」來臨の兆候ゑ由り其時の近づきたるを知りて亦皆頻りに其來臨を待てり。而して當時諸國ゑ散居したる猶太人わ「メッシャ」來らば必ず猶太國を再興して盛大

ならしむべきを信じ「メッシヤ」を以て國王なりと想像し彼必ず四方より
イズライリの諸支派をイエルサリムと約せられたるの地に集め猶太
國民の均く厭ふ所の羅馬の管轄を脱せしむべしと思へり。
此の如く偶像崇拜に耽り有ると有らゆるの罪惡に溺れ五里霧中に彷
徨ひて之より救脱するの途なかりし全人類に基督教は始めて教の眞
理を傳へたり。苟も己の憫むべき生活の目的を知らんと欲し其の求め
て得ざるの義を尋ねんと欲するの念ある者罪惡の娯樂に飽果たる者
勞苦する者及重を負ふ者い皆燃るが如きの信仰を以て使徒が傳ふる
處の新なる愛の言を其心に受けたり。基督教は先づ己の像と肖とに似
せて造りたる凡ての生ける靈魂の父なる眞神ありて罪に陷りたる人
類を愛するより神の子救主基督として此世に降り其本性に由り人と
合して人の貌を受け人性に由りて苦を受け己と偕に其人を永生に復

活せしめたるを知らしめたり。福音を世に傳へたる者は皆基督と共に
此世に居り彼よりして世に遣はされたるの活證者なりしを以て老少
男女を問はず其の燃るが如き熱心の言を聞き死をも恐れずして厚く
基督を愛するの心を起せり。
基督教い始め貧賤なる人々の間に傳はりて久しき間政府幷に異教徒
の注意する處とならず。世人は基督教を目して猶太教の一派と見做し
之を嘉みせざるも又敢て之を敵視せず基督教が獨り神に選ばれたる
のエウレイ民のみならず全人類を包括し之を以て猶太教と其趣を異
にするを悟らざりき。羅馬に於ける聖教會の初實の果の勢を得て實力
堅固になるまでい之を仇敵視する異教人をして之に其意を注がしめ
ざるおと是れ主の旨なりしなり。斯かる平穩無事の間に羅馬の聖教會
い信者の品行を矯正し其心を改め其剛毅勇敢の氣象を養ひつゝ駸々

として進歩蔓延し羅馬の魏々平たる宮殿に於て異教の偶像を祭るの禮行いるゝの間に基督教い密々に下等社會の間に傳はれり。基督教徒い洞窟に相會して祈禱を爲し神の言を聞き彼の富み且華麗なる異教の羅馬が滅亡に際せし時に已に此の幽暗き洞窟の裡に新なる生活萌せり。異教人が基督教徒に着目し已の仇敵として殘酷に之を窘逐せんとせし時には其數已に甚だ多く皆已に基督の剛毅なる軍士となり自ら進んで窘逐を受けんとするの決心を懷けり。

救主基督自ら其教を窘逐せんとする者あるを預言して曰く『我の地に持來れるは平安にあらず乃ち刀なり』(馬太十四)と。猶太人異教人は皆擧りて新宗派を奉ずるの基督教徒を窘逐せり。猶太人は基督が神の選抜を蒙りて天下に王たるべきエウレイ民族の勢力を恢復して其國威を輝さんとする斯世の王にあらざるを見るに及んで基督教を憎み彼等に

書約の廢滅したるを傳へたるの初致命者聖ステファンい彼等の手に由りて致命せり又異教を奉ずる政府の基督教に對する嫉惡の情は其教の猶太教と別種の者たるを見るに及んで益々烈しきを加へたり。基督教徒は凡そ異教徒の神聖と見做す處の者を擯斥し異教徒の公私の生活上に關する習慣及び儀式を多く排斥せざるを得ざりき。基督教の教義及び道德の原理い全く多神教の主義に反し異教社會の萬般の狀態に適合せず且つ異教徒に知らるゝこと甚だ淺きを以て世人は概ね基督教を以て神を信ぜざる有害の邪教と見做し此新宗教に入るを以て國家に背逆する者と爲し民間にてい基督教徒を評して猥褻言ふに忍びざるの事を行ひ恐るべきの罪を犯す者となせり。

基督教徒に對する最初の窘逐は六十四年ネロン帝の時に起れり。偶〻羅馬府に大火ありて其大半を燒盡せしが其原因を搜るに及び罪を基督

教徒ゝ歸し此ゝ始めて激烈なる窘逐を起し羅馬國内到る處として窘逐行はれざる處なく殆んど四年間打續きチロン帝の崩ずるゝ及びて止めり。羅馬府内にハ窘逐殊ゝ慘を極め或ハ獸皮を体ゝ縫付け之と犬ゝ投じて嚙み裂しめ或ハ之を十字架ゝ釘し或ハ体ゝ樹脂を塗り柱に縛りて之を燒きなどしければ殘酷なる觀劇を見るゝ慣れたる異教人すら基督教徒が慘苦を受くるの有樣を見て戰慄せりと云ふ。

此の殘酷なる窘逐の時聖使徒ペトルとパウェルハ羅馬ゝあり危難を恐れ怱々として福音を傳へたり。チロン帝は基督教の蔓延するを見て怒ること甚しく聖使徒を刑に處せんとして之を搜索し二使徒ハ幾もなく獄に繫がれたり。傳へ云ふが如く聖使徒等ハ獄中ゝ在ること凡そ九ヶ月にして獄卒を敎ゝ歸せしめ奇蹟を行ひたり。使徒パウェルは獄中よりティモフェイに贈れる書ゝ謂て曰く『我今已ゝ祭物とならんとす我が

世を逝る期迫づけり。我已に善戰を戰ひ已に馳るべき道程を盡し已ゝ信仰を守れり。今より后義の冕我が爲ゝ備へらる主即ち公義の審判者その日ゝ於て之を以て我ゝ賜ハん獨り我ゝ賜ふのみならず亦凡そ彼の顯著を慕ふ者に賜ハん』（提摩太後書四乃至八）

斯くて使徒等ハ死刑ゝ定められたり。ペトルハ己の妻の刑ゝ處せらるを實見し而して后自から羅馬人の最も恥辱となせし十字架の刑を受けたり。敎會の聖父等ハ主がペトルに向ひて『爾老ゆる時ハ人爾の手を伸べ爾を束ね爾を曳きて往くを欲せざる所ゝ至らん』（約翰二十一の十八）といへるハ乃ち之に十字架の死を受くべきを預言せしものなりと云ふ。

聖使徒パウェルハ羅馬國人なるを以て恥辱の刑を免かれて斬首せられたり。傳へ云ふ處に依れバ基督教徒ハ聖使徒等の屍を『カタコムブ』（洞窟）ゝ葬れりと云ふ。信者等ハ日夜聖大二使徒の墓に詣でゝ祈禱し恭しく

其紀念を行へり

羅馬の聖クリメントハ己の書に謂て曰く『ペトルハ人々の邪惡よりして多くの苦難と忍び受け遂に致命して之に備へられたる光榮の所に達せり。パウェルハ惡と戰ふて忍耐の摸範を示し不朽の榮冠を得たり。彼ハ七次桎梏に繫がれ流竄せられ石擊せられたるも屈せずして神の言を東より西の極に至るまで播傳し普世に公義の道を傳へ遂に此世の有司の命に由り致命して此世を去りて聖なる所に至れり』。

使徒行傳にハ聖使徒ペトルの事に關しイエルサリム公會后に行ひたる所の事を記さず。案するにペトルハ特に割禮を受けたる者の使徒（加拉太二の七）即ち猶太人の使徒にして彼の書ハ二書共に散居せる選ばれたるの賓旅即ち小亞細亞、叙利亞、巴比倫等の異教人の間に散居せる猶太人の信者に贈れり。使徒ペトルハ主より專らイエルサリムに傳教するを

命せられたるを以て此に始めて教を傳へ眞に教會を建つるが爲めの石（馬太十六十八）と爲り天國の門を初めは猶太人に（使徒行傳二の十四乃至四十二）次に異邦人に（同上十一）開くの任を盡せり。又聖使徒パウェルハ割禮を受けざる者の使徒即ち異邦人の使徒なりき。彼尙サウルと稱せし時主自から異象に於て之に顯れて『往け我爾を遠く異邦人に遣いさん』（使徒行傳二十二十一）と云へり。既にパウェルと名づくるに及びて神の名を遠隔の地に傳へ其勤勞苦難遙に諸使徒の上に出で其書中に奥妙活潑なるの言を以て主耶蘇基督に從ふ者の行ふべき道を細說せり。彼の書ハ總計十四あり、羅馬人に達するの書一、コリンフ人に達するの書二、ガラティヤ人に達するの書一、エフェス人に達するの書一、フィリップ人に達するの書一、コロス人に達するの書二、テイモフェイに達するの書二、テイトに達するの書一、フィリモンに達するの書一、エウレイ人に達するの書一な

りパウェルの教の要点とする所ハ猶太人と異邦人との區別ハ新約ニ於て廢せられ恩寵ハモイセイの儀式的の律法ニ依らず眞正の信仰ニ由りて何人ニも賜ハり凡そ基督教徒たる者ハ猶太人たるとエルリン人(即ち異邦人)たると奴隷たると自主の人たるを論ぜず皆均しく唯一の体唯一の教會を成し其首ハ基督ニして基督教徒の生活の基礎たるべきものハ律法の文字ニ非ずして信と愛の精神なることを示すにあり。

パウェルハ自から熱心燃るが如く基督教の愛を説くこと最も深く其のコリンフ人ニ達するの書(哥林多前書十三章)ニ言ふ所の如き誠ニ至れり盡せり。

後世金口イヲアンハパウェルの愛の道を敷演し羅馬人ニ達する書ニ對する講談第三十二ニ於て簡明ニ最も善くパウェルの意を説けり。

ペトル及びパウェルハ衆ニ先だち福音を傳ふるの任を蒙れるを以て此二人を首座の使徒と稱す。

第二　聖使徒

使徒の信經。　使徒イアコフ、マトフェイ、マルク、ルカ、アンドレイ、神學者イヲアン。

主耶蘇ハ嘗て己の使徒ニ福音を傳ふるを命せしとき之ニ預言して福音の爲に世人に迫害せられ主の名の爲ニ世ニ憎まれ王公有司の前に訴へらるべしと云へり。然れども主ハ亦之と共ニ彼等ニ全能の佑助を予ふるを約し恒ニ自ら己の教會と偕ニするを約し聖神が彼等に智慧と忍耐と辨力を予へんとするを約し且つ基督の名を以て休徵奇蹟を行ハんとするを約せり。

使徒等ハ基督より首としてイエルサリムニ於て衆人の前に基督の復

活せる事を証するを命せられたるよ由り（行傳一の八）聖神降臨の后よゝ専らイエルサリムよ於て教を傳へたりしが後亦仝し基督の言よ循ひ四方よ散じ『地の極に至るまで』遍歴して福音を傳へ洗禮を施し到る所に信者の社會を組織し教會を堅立せり。使徒等ゝ相集りて聖神の感應よ依り始て信經を編纂せり。即ち使徒の信經と稱するものにして左の十二箇條より成る。

（一）我信ず全能の神、父、（二）天地の創造者を（三）又信ず其獨生の子吾等の主耶蘇基督（四）聖神に由りて孕まれ童女マリヤより生れ（五）ポンティピラトの時苦を受け十字架よ釘たれ死して葬られ（六）地獄よ下り第三日よ死者の中より甦り（七）天よ昇りて全能なる神、父の右よ坐し（八）彼處より生者及び死者を審判するよ來らんとするを（九）又信ず聖神及び聖公教會（十）聖者の交通（十一）肉體の復活及び（十二）永生を。

聖教會の傳よ據るよ使徒等ゝ至聖童女マリヤの就寢の日よイエルサリムに不可思議よして來集しマリヤの天榮を受けたるを實見せりと云ふ。

聖使徒イアコフゝイエルサリム教會の主教となり諸使徒の中一人恒にイエルサリムよ居れり。イアコフゝ品行端正くして嚴格き生活を爲し齋を守り常よ聖殿に在りて祈禱を爲せしを以て猶太人の不信者と雖も之を尊敬し皆之を呼びて義人及び民の楯と稱せり。五十九年よ彼ゝ當時四方に散居せる猶太の基督教徒よ公書を贈り之よ災難の間よありて忍耐服從し和平温柔相愛を守るべきを諭し特よ善を行ふて基督に於ける信仰を表証するを勸めたり曰く『行なきの信ゝ乃ち死す』と。

イアコフゝ始て聖体機密を行ふの儀式を定め今日に至るまで彼の記憶日よイエルサリムよ於て之を執行す。

使徒時代の實見者たる第二世紀の教會の史家が聖使徒イアコフの遠逝を記して曰く猶太人中イアコフの言に依りて基督を信ずる者多く長老にして之を信ぜる者さへ出でければ「ファリセイ」人及び士子等ハ大ゐ激したりしが彼等ハ人民の深くイアコフを愛するを知り人民が基督を信ずるハ彼の言と彼の行の端正さゐ由るものなりと想像し之を説きて民の基督教ゐ歸するを中止せしめ且彼をして自から十字架に釘せられたるの「メッシヤ」基督を信ずるの心を翻さしめんとせり。偶〻「パスハ」の祭ゐ際し人民イエルサリムゐ群集しければ彼等ハイアコフを聖殿の屋上に立て民ゐ向ひて説教すべきを促せり。イアコフ高聲ゐ謂て曰く『汝等ハ人の子耶蘇の事に就きて我が説を聞かんとする乎。彼ハ今天に在りて神の能力の右ゐ坐す后再び天雲ゐ乘りて生死者を審判するに來らん』と

此時群衆の中にある信者ハ喜びの餘り聲を揚げて『光榮ハ神ゐ歸す。ダウイドの子に萬福』と呼べり。「ファリセイ」人及び士子ハ怒ること益々甚く絶叫して『義人ハ迷へり彼を引下すべし然らば民ハ彼を信ぜざらん』と云ひ之を引下して石擊しけるに義人イアコフハ氣息の奄々なる際全力を注ぎて身を起し跪きて天を仰ぎ高聲ゐ祈りて曰く『主神ゐ彼等の罪を赦したまへ。彼等ハ其爲す所を知らず』と。人々石擊する時リハウの族の一祭司絶叫して群衆の中に躍り入り『汝等何を爲すや。義人ハ汝等の爲ゐ祈るに汝等彼を擊つ乎』と云ひけるゐ或者荒き皮の鞭を以てイアコフを撲ちて其頭を碎けり。

聖使徒マトフェイハ初め猶太ゐ傳教しエウレイ語を以て始て福音書を著ハせしが此福音書ハ間もなく希臘語に翻譯せられたり。傳に據るゐ之を譯せし人ハ神學者イヲアンなりと云ふ。

聖ルカハ使徒パウエルの忠實なる同行者となり共ニ羅馬ニ至り其の死する時に至るまで之と相離れざりき。彼ハ主の昇天の后十五年を經て希臘語を以て福音書を著し又聖使徒行傳の書を以て吾人ニ基督教弘布の貴重なる歴史を傳へたり。ルカハ諸方ニ教を傳へて希臘の一市ソルンの主教と爲り遂ニ致命して死せり。一説ニハエフェスに於てせりと云ひ又一説にハパトラフニ於てせりと云へり。聖ルカハ醫者及畫工なりき。

聖マルクハ使徒ペトルの始て羅馬に旅行する時之と同行し其指導に由り希臘語を以て福音書を著せり。マルクハアレキサンドリヤ教會の最初の主教と爲りアレキサンドリヤに后世著名となりたる一學校を創立せり。聖マルクハアレキサンドリヤニ於て異教徒ニ迫害せられしがその死するニ先だち基督之ニ現れ喜んで彼の世に移れり

初召使徒聖アンドレイは猶太、希臘及黑海の海濱にある小亞細亞の諸州及びグルジヤアブハジヤ等ニ教を傳へ當時スキフと稱ひ未だ周ねく世に知られざる露西亞の地ニまで至れり。露國古代史家の傳ふる所に依れバ聖アンドレイハタウリヤのヘルソチス(即ち現時のクルイム半島)ニ教を傳へ后ドヂプル河を溯りて現時キエフ府のある所ニ到り山上ニ十字架を立て同行者ニ向ひて『他日此處ニ神の恩寵輝き神の聖殿起り此處よりして眞光四方ニ發輝せん』と言へりと云ふ。斯くて聖使徒アンドレイハノウゴロドニまで至れり。

聖アンドレイは黑海ニ瀕せるシノプ府ニ於て大ニ異教人に迫害せられたり。后彼ハウイザンティヤ(即ち現時のコンスタンティノポル)に教會を創立し遂ニ希臘のパトラフ府ニ於て教の爲ニ致命せり。此府ニ於てアンドレイの福音を聞き奇蹟を見て基督を信ずる者多く郡守の兄弟及び

其妻も亦之を信せしかゞ郡守怒り命じて聖使徒を捕へ獄ゑ繫ぎしに信者ゝ祈禱を爲し且聖使徒の敎を聽かんとて獄の周圍ゑ群集し基督敎徒の數ゝ益〻增加せり。郡守ハアンドレイを召して基督ゑ背くべきを說諭し『彼の惡漢として磔刑ゑせられたるの人を爭かで信ぜるを得んや』と云ひしに聖使徒ゝ救主基督が人を愛するより甘じて苦を受け自ら死して人間を神と和睦し之に永生を賜ひたる所以を說明せしゑ郡守ゝ救贖の眞理を信ぜ聖アンドレイを十字架ゑ釘すべしと宣告せり。抑も十字架ゝ異敎人が最も耻辱の刑具と爲せしものなるも基督敎徒ゑ取りてゝ基督の死にて聖にせられたるものなるを以て聖使徒は欣然として其命を奉じ高聲ゑ呼んで曰く『アヽ予が夙に愛せし所の十字架よ今我を人々の間より取りて我の師ゑ予へよ。願くゝ爾を以て我を救ひ給へる者ゝ爾ゑ由りて我を受けん』

郡守ゝ聖使徒をして永く苦痛を忍ばしめんとし之を釘けぎして縛れり。人民ゝ使徒の聖なる行を見其敎を聞きて之を愛せしが故郡守の所爲を憤り皆相叫びて『此の聖なる人此の主の友ゝ何故ゑ苦めらるゝや』と云ひ大に騷擾せり。アンドレイゝ十字架の上より民ゑ敎誨を垂れ恭順を守るべきを諭し人を愛すべきこと侮辱を寬容すべきこと幷ゑ永生の理を說けり『凡そ義の爲ゑ死する者ゝ死を恐れず彼等ゝ之ゑ由りて幸福なる平安の域ゑ達するのみ。唯此世ゑ於て罪の奴隸と爲れる者ゝ永遠の苦に行くを以て死を恐る。兄弟よ我が敎を忘るゝ勿れ。汝等宜く眞の敎を愛し主耶蘇基督の誡を守るべし』と。斯くて聖使徒ゝ十字架ゑ縛らるゝ事二晝夜なりしが其間師たる基督の例ゑ傲ひて唯愛と赦免の言を吐くのみなりき。三日目に至り人民ゝ郡守に迫り恐喝絕叫して使徒を十字架より下さん事を促がしけれゞ郡守ゝ民の亂を爲さん

ことを恐れ自ら刑場ゑ至り兵士ゑ命じて聖致命者を十字架より下さしめけるにアンドレイハ祈禱を爲しつゝ其靈魂を神ゑ托せり。

神學者聖イヲアンハ諸使徒中最も長壽を保ちて小亞細亞の諸州ゑ福音を弘布せり。七十使徒の一人ゑしてイヲアンの門徒たるプロホルと云へる者其傳道を助けたり。聖使徒ハ勞を厭はゞ小亞細亞の諸邑を遍歷しエフェスを以て常ゑ其の居る所と爲し到る處福音を傳ふると共ゑ奇蹟を行へり。イヲアンハ品行端正くして溫厚柔和神ゑ務むる甚だ熱心ゑして人を憐むこと深きを以て人皆之を愛敬し神の道の蔓延することと速ゑして異教の妄信地を拂つて去れり。

斯くする間に再び教會ゑ殘酷なる窘逐起らんとせり。チロン帝の崩せし后基督教徒ハ少しく安穩なりき。彼等ハ全く安全なりといふゑあらざるもチロン帝の后任者の時代ゑハ基督教ゑ對して公然たる窘逐な

かりき。八十一年の頃ドミチアン羅馬の帝位に昇るゑ及び殘酷なる窘逐再び起れり。

九十四年の頃ドミチアン窘逐を起し最近き親戚と雖も惜まざりき。蓋し當時基督教ハ既ゑ皇室ゑまで及びたるなり。羅馬帝國内の諸州ゑ窘逐殘酷ゑ行ハれ、雅典ゑ於てハパウェルの門弟デヲニシイ刑せられ、ペルガムに於てハ聖アンティパ迫害せられ、神學者聖イヲアンハエフェスより羅馬に引致かれたり。ドミチアンハ猶太人の亂を釀さんとするを恐れダウィドの族より出でたる猶太人に嫌疑を置き悉く之を窘逐せしがイヲアンハ仝じく此族より出でたるものなりき。皇帝ハ老年の聖イヲアンゑ基督教を棄つべきを諭し殘酷ゑ之を笞ち慘刑を以て之を强迫し信仰と翻さしめんとせしもイヲアンハ自若として苦を受け己の師ゑ背かざりき。ドミチアン之ゑ毒を飲ましめけるゑ『爾等毒を飲むとも害

なかちん』（馬可十六の十八）と約せる救主の言ゝ依りて害と受けず後沸騰たる油釜に投入れしゝ亦其身ゝ害を爲さゞりければ見る者其奇蹟に驚き聲を揚げて基督教徒の神ゝ大なるかな』と云へり。是に於てドミチアンゝ斯く無形の能力に護らるゝ人にゝ如何なる慘刑も其効なきを悟り命じてイヲアンを小亞細亞の海濱に在るパトモス島ゝ流竄にせり。然れども放逐も其他如何なる事たりとも聖使徒をして主の愛より離れしむる事能ゝざりき。荒漠たるパトモス島ゝ於て主ゝ已の愛する門徒ゝ異象を以て己の榮と教會の將來の運命を示しイヲアンをして其默示を錄さしめたり。聖イヲアンの「アポカリプシス」即ち默示錄と稱するの聖書に載する所の者即ち是なり。イヲアンゝ此異象を記し畢るに當りて主耶蘇ゝ速ゝ來り給へ』と呼べり。イヲアンゝ此言を以て彼が此世ゝ於て其深く愛せし所の主と体合せんと欲するの熱切なるを表せ

り。然れども彼ゝ尙此世に生存して主の爲ゝ勞せざるを得ざりき。ドミチアン崩じてチルワ皇帝と爲るに及び窘逐ゝ中止せられたり。此時異端即ち聖教の眞理と不正ゝ解釋する說基督教徒の間ゝ起り殊ゝ小亞細亞ゝ盛んなりき。使徒パウェルゝ曾てコリンフ人に向ひて『僞の使徒、詭譎を行ふ者、基督の使徒の貌を冒す者』（哥林多後書十一の十三）あるを示し、又エフェス教會の長老と訣別るゝに當り『群を惜まざる殘狼』を預防すべきを戒め彼等の間に『門徒を已ゝ從ゝいせんとて悖理なる言を吐く者の現ゝれんとするを預言し（行傳二十の三十）又使徒イウダゝ己の書（四節）ゝ於て我等の神の恩寵を易へて淫亂の因となし唯一の主宰即ち神なる我等の主耶蘇基督を拒む不敬虔なる輩の潛かゝ信者の間ゝ入りたる事を明言せり。

此邪說ゝ甚だしく信者の心と動かしければエフェス教會の長老及有志

の基督教徒等ハイヲアンより其の親しく師より聞く所より基督の事の教を述べんことを求めたり。傳へ云ふ所より依れバイヲアンハ先づ基督教徒をして齋を守らしめ自から其門弟プロホルと倶に山より避け三日の間禁食祈禱して遂に天より默示を得プロホルをして聖神の己に示す所のものを其言のまゝ錄さしめたり。彼の冒頭に基督の神父と一体の神言たる神性を具ふる事と其の世界の造物主たることを高尚に識認して筆を下せるイヲアンの福音書ハ是の如くにして錄されたり。神の默示を得たる福音者ハ異端者の妄を駁し明言して曰く『夫れ言、肉身と成りて我等の間に居れり。我等其榮を見るに猶神の獨生の子の榮のごとし』(約翰福音一の十四)

イヲアンハ年老ひ疲勞して遠く旅行すること能ハざるに及びても尚基督教徒等の集會に臨み諄々として基督教徒に教訓を垂れたり。福イ

エロニムの言ふ所に依るに門弟等手づからイヲアンを携へて信者の集會所に至りけるに彼ハ已の師なる基督より受けたる誡を述べ『小子等よ汝等互に相愛せよ』と反覆しけれバ門弟ハ怪みて『何故斯く同一の言のみを反覆し給ふや』と問ひしにイヲアン答へて『若し實行せバ此一言にて足るが故なり』といへりとぞ。

聖イヲアンハ第二世紀の初めに至りて世を逝れり。イヲアンハ長命を保ちて教を傳ふるの間に多くの門弟を養成せしが彼等ハ皆熱心鋭意基督教を播傳し躬行を以て基督教徒の德行の摸範を現ハせり。イヲアンの高弟を捧神者聖イグナティ及びスミルナの主教聖ポリカルプとす。

第三　使徒の徒

ワルナワ、クリメント、イグナテイ、ポリカルプ。

神學者イヲアンの死すると倶ゑ基督教の第一世紀即ち使徒の世ゐ終れり。神言の實見者ゐ皆此世を去れりと雖も彼等ゐ各己の門弟ゑ其の主より賜ゐりたるの權理即ち聖言を傳へ機密を行ひ罪を縛り且釋き幷ゑ万民ゑ教を傳へ父と子と聖神の名ゑ依りて之ゑ洗禮を施すの權を授け且つ世末に至るまで人類の爲め安樂慰籍教訓の源泉となるの聖書を遺せり加之ならず基督ゐ已の教會ゑ常ゑ居る事を約せしを以て教會ゐ恐るゝ事なく敵の妨害ゑ當るを得たり。使徒の多くの門弟ゐ熱心に福音傳道の業を繼續せり。使徒より直接ゑ教を受けたる人々を

教會史上ゑ『使徒の徒』と稱す。其中功績の著しきを以て芳名を垂れたる者あり或ゐ初代教會の事を記せる書を著ゐして後世ゑ其名を知られたる者あり即ち聖ワルナワ、捧神者聖イグナテイ、スミルナの聖ポリカルプ、聖クリメントの如き是なり。

聖ワルナワゐ使徒パウルの親友ゑして常ゑ之と同伴し共ゑアンティオヒヤに教會を創立しキプル島ミランゑ教を傳へサラミンゑ於て致命せり。聖書ゑ記す所ゑ依るに彼ゐ始て貧者ゑ施すが爲ゑ其財産を賣りたる者の一人ゑして初め其名をイヲシヤと稱せしが憂悲者を慰むる特別の恩寵を有せしが故使徒ゐ之をワルナワ即『慰藉の子』と稱せり。

聖クリメントゐ羅馬ゑ生れ其家富貴ゑして皇室ゑ縁あるものなりき。其家奇禍ゑ遇ひしを以て彼の幼年の履歴ゐ明かならず。クリメントの猶嬰兒のとき母ゐ二人の兄を伴ひ遠く旅行を企てたりしが其后行衛

更に知れざりければ父は憂に沈み羅馬に小兒クリメントを遺し妻子を捜索せんとて家を出でける路にて彼等の乘込める船の暗礁に觸れて破船せしを聞き失望して家に歸るの力なく多年の間神の照管に救護せられつゝ相離散し互に亡きものと思ひ定めて悲歎せり。

クリメントは獨り羅馬に在りて生長し其家豊かなるを慈母の愛を受けざるより幼年の樂を識らず常に憂愁せり。長ずるに及び博く當時の哲學を研究したるも異教の學問に於て已の恃みとすべきものとも將た慰みとすべきものをも得ざりき。是に於て日夜悒鬱として兩親と同胞に別れたる事のみを思煩ひ此世の幸福に於て樂みを得ず自ら煩悶して此墓なき浮世の外に更に善き生活あらざる歟と自問へり。斯くて歳月を經るに隨ひ益〻憂鬱となりしが、やがて二十四歳に達しけるとき始めて基督の此世に臨める事を聞くに及び心に始て喜を覺え熱心に

基督のことの教を知らんと欲するの望燃え起り遂に已の家を棄て富を抛ち當時聖使徒の教を傳へ居れりと聞きし猶太に赴けり。猶太に到るに及び聖使徒ワルナワより始めて福音の言を聽き使徒ペートルに就きて洗禮を受け其門弟と爲りて之と俱に羅馬に歸りけるに路にて父母兄弟に奇遇再會し悉く之を基督教に歸せり。

クリメントは羅馬に於て常に聖使徒ペートルと勞を共にし忍耐と相愛を以て神の道を傳へたり。使徒ペートルは致命して死するの先きクリメントを立てゝ羅馬府の主教と爲せしにクリメントは其敏腕を揮ひて多年の暴風怒濤の間に漂へさるゝ基督の教會なる大船を運轉せり。クリメントの教會に盡せし功勞の紀念として遺れるものは彼がコリンフ人の質疑を辨解したるの書なり。使徒の愛と温柔の精神に富める聖クリメントは其書に於て放縱なるコリンフ人に謙遜を守り悔改

して神品に服從すべきを諭し教會の紐織の悉く神立に係るを証せり聖クリメントの此書い古代教會に於て大に重んぜられ公祈禱の時使徒の書と共に聖堂に於て讀まれたり。聖クリメントの高潔なる品行い啻に普通の人民を感化せしのみならず貴人學者と雖も皆之を欽慕せり。貴顯の人々基督教に歸する者多かりけれパトラヤン帝大に怒りて聖クリメントをタウリヤのヘルソヂスに流竄し截石の苦役に服せしめんとせり。聖クリメントいヘルソヂスに赴くに及んで己の志す所の業を見出せり鑛山の内に苦役に處せられたる基督教徒多くありたりしが此の憂愁失望せる不幸の輩い皆聖クリメントの祈禱に由りて其氣力を回復せり。且つ獨り基督教徒のみ聖クリメントの愛の言に由りて望を起し心に慰藉を得たるのみならず異教人の中にも信じて洗禮を受くる者多かりき。トラヤン帝い之を中止せんとし命じて拷問慘

刑に處せしめけるに彼等が皆欣然として基督の爲に苦を受くると聞き多くの人民を亡さんよりい寧ろクリメント一人の生命を絶たんと決心し之を小舟に乘せ遠く漕ぎ出て海中に投せしめたり。此時人民い海濱に立ちて祈禱を爲し流涕して之を送れり。聖使徒パウェルいフィリップ人に贈るの書に聖クリメントの事を記し『生命の書に其名を錄されし者』の中に之を加へたり。

后數百年を經てクリメントの聖なる屍いスラウヤン人の教化者キリール及メホディイに發見せられたり。聖クリメントい使徒アンドレイに次きて露西亞の地に基督教を傳へ之よりして後世露西亞全國に福音の眞光輝きたり。

捧神者聖イグナティイの事い教會の傳に記す處詳かならず即ち左の如し。『イグナティイ尙幼くして彼の主基督が人と俱に此世に居りて民に神

の國の事を敎へしとき主ハ之を招ぎ抱きて手ヨ捧げ爾等翻りて此孩提の如くならずバ天國に入らじ凡そ我名に由りて此の如き孩提を接くるものハ則ち我を接くるなりと云へり。聖イグナティが捧神者と名づけらるゝハ彼が人体を藉りたる神の手ヨ抱かれたるが故ヨして又一にハ彼が已の心に神を抱き己の口ヨて神の名と異邦人及諸王の前に傳へたるが故なり』〈チテミ子〉

聖イグナティハ幼より神學者聖使徒イヲアンの門弟と爲り聖使徒ペトルに就きて敎を聞き金口聖イヲアンの言ふ如く『言ヨ於ても行ヨ於ても之と俱ヨせり』。神學者使徒イヲアンハ自から彼を按手してアンティオヒヤ敎會の主敎と爲し而してイグナティは三十餘年の間此敎會を治理たり。

當時ハ內外甚困難の時代なりき。外ヨはドミチアンの基督敎徒ヨ對して起せる窘逐到る處ヨ劇しく行はれ、內ヨハ異端を唱ふる者出て基督敎の眞理ヨ於ける信仰を動かさんとせり。聖金口イヲアンの言ヨ依るヨ聖イグナティは神と人々に對して大なる務を盡すの間凡そ人間の爲す得べき德ハ一として之を表ハさゞるなかりしといふ。彼ハ日夜敎訓を垂れ祈禱を爲し愛と盡して神の已ヨ托し給へる信者の群を守り『弱信若くは無經驗の者をして一人たりとも溺るゝ事なからしめんとせり。』彼ハ又奉神禮を壯麗にするを好み專ら之を務め始めてアンティオヒヤ敎會ヨ二列の嚴かなる和唱歌を設け常ヨ說敎ヨ於て一致和合及び愛の精神を以て行ふ所の公祈禱の効力大なるを說けり。彼書して曰く『若し彼の人或は此の人の祈禱ヨして効力大なりとせバ況んや主敎及び全敎會の祈禱をや』と。彼の敎訓は皆愛と謙遜の精神を帶べり。彼曰く『我自から基督ヨ於て不完全なり而して汝等に說敎するは我が汝等

を愛するの情ハ我をして默せしめざれバなり』と。彼が羅馬教會の基督教徒に贈れる最后の書ヨ於て『我は善牧者なり』と言ひし主が自ら必ず臨みて慮るべきを確信しつゝアンティオヒヤ教會の爲ヨ祈らん事を求めたる如きは誠ヨ一讀感嘆ヨ堪えざるものあり。

百七年ヨトラヤン帝ハパルヒヤ人を征せんとし軍を率ゐてアンティオヒヤヨ來りし時府民は嚴に之を迎へたるも基督教徒等之ヨ加はらず主教イグナティは之が教唆者なりと訴ふる者ありければ皇帝ハ其事を糾問し『兵士をしてイグナティを羅馬に護送せしめ之を猛獸に投じて人民の娛樂に供すべし』との裁決を下せり。信者の悲嘆譬ふるにものなく流涕慟哭して之を送れり。主の名の爲ヨ囚人となれるイグナティの旅行ハ甚だ困難ヨして之を護送せる十人の兵士は虐待を極めしも信者の愛と心服ハ此の悲むべき旅行を變じて恰も凱戰の榮冠を受く

るヨ赴く者の如くなせり。到る處基督教徒等ハ群を爲し出て主教を迎へその最后の降福を受け最后の教訓を聞かんとし多くの教會ハ代表者を出して之が安否を問ひ之ヨ務むるを以て喜びと爲せり。聖イグナティは其愛情を謝せんが爲め旅行の間ヨ七通の書簡を書して贈れり其中に彼が羅馬府に至り刑を受くるヨ臨み基督教徒等が其の欣然として受けんとするの死より救はんとするを恐るゝの文あり。彼書して曰く

『我ハ基督ヨ於けるの囚人なり。故に我ハ神ヨ祈り其の我を佑け我が命運をして終りヨ至らしめん事を求む…我ハ汝等の愛を恐る…我ハ主ヨ行くを望む…汝等愛を以て我を妨ぐる毋れ乃ち宜く我が爲ヨ祈り主が我ヨ力を賜へ我をして『爾等若し世に属せば世ハ己ヨ属するものを愛すべし。されど爾等は世ヨ属せず我爾等を世より選べ

り。故に世は爾等を惡む爾等我が愛に居るべし（約翰十五の十九）と云へる主の言を記憶して啻に之を口に言ふのみならず眞に之を望むを得せしめんことを求む…我い主即ち眞の神及び父の子なる耶蘇基督を望む。我は彼の吾人の爲め死して復活せし者を尋ぬ…兄弟よ我を救せ我が生命に行くを妨ぐる勿れ乃ち我をして光を見るを得せしめよ…凡そ己の衷に基督を懷く者は必ず我が意を悟らん…我い精神活潑耶蘇基督に於けるの熱愛と彼の爲に死せんと欲するの切なる望を以て汝等に書す。我が愛い己に十字架に釘せられ此世に戀々たるの情已に我にある無し。汝等我と共に祈り聖神の佑に由りて我が目的を達せしめよ』

聖イグナティは此書を贈りたる后自ら羅馬に到りしに羅馬教會の基督教徒は悲嘆して之を迎へ敢て之を止むる者なく皆共に跪きて祈禱

し互に神の愛に一任し聖教會に和平を賜へ各信者に善を行ふの勢力を賜いん事を祈り、而して后涙を垂れ聖イグナティを抱きて之を兵士に渡しける兵士い直に之を刑場に曳き往けり。是時祭禮の遊戯い將に終らんとし鬪獸場にい聖なる老人の刑に處せらるゝを見んと欲するの看客充滿せしが故時刻を遲延すること能いざりき。

聖イグナティい從容自若として民に向ひ高聲を放ちて曰く『羅馬人よ汝等宜く知るべし我の此の死刑に處せられたるい惡を行ひ罪を犯せしが爲にあらずして我が愛する唯一の神に於ける信仰の爲なり。我は神の麥粉なり。今猛獸の齒にて嚙碎かれ神の爲に清淨き麪包とならんとす』と、言ひ終るや否猛け狂ひたる二疋の獅子は直に飛來りて嚙く間に之を嚙裂けり。是れ實に百七年の十二月廿日なり。

基督教徒等い恭しく致命者の遺骨を集め之を目擊せるフィロン及アガ

ホポドンハ其致命の有様を記して其遺骨と共ニアンティオヒヤに送れり。

其書の結末に左の如く記せり。

『此事を目擊したるの我等ハ終夜家ニ在りて涙ニ呉れ跪きて神ニ禱り此事ニ就て我等と慰め賜ハん事を求めたり。斯くて我等ハ眠ると間もなく或者ハ福イグナライイが我等の傍に立ちて我等を抱くを觀又或者ハ彼が我等の爲ニ祈るを見又或者ハ恰を大勞苦を爲せし後の如く滿面汗を垂れて主の前ニ立つを見たり。我等ハ之を見互に其夢みし事を物語り喜んで神を讃美せり。』

聖ポリカルプハ捧神者イグナライと同く使徒イヲアンの門弟なりき使徒イヲアン之を按手してスミルナの主教と爲し四十餘年の間教會を牧し數代の窘逐に遭遇せり。マルク、アウレリイ帝の窘逐の初異教人激動して聖主教ポリカルプを刑ニ處せん事を請求たり。ポリカルプハ

初め依然として市内に居らんとせしニ左右の人々の勸めニ從ひ遂ニ一村に避けたり。彼ハ此ニ在りて祈れる時已の枕の燃る異象を見たりけれバ左右の者ニ向ひて『我ハ生ながら燒かれん』と云へり。間もなく其避所發見せられけれバポリカルプハ『願くは主の旨成らんを』と云ひ自ら出て追跡者に接し之ニ饗應を爲し暫く猶豫を乞ふて祈禱し後從容として刑場ニ赴けり。羅馬兵の大將ハ聖ポリカルプを見て切に基督を棄つべきを勸めけるも聖ポリカルプは毫も志を動さゞりき聖ポリカルプの刑場に出づるを見て民ハ絶叫しが聖ポリカルプ及び之を圍繞れる基督教徒等ハ『勇めよ、心を動かす毋れ』との聲を聞けり。太守ハ聖ポリカルプニ向ひ『汝宜しく老邁たる身を惜み熟考して羅馬帝の英威を拜し基督を誹謗せよ。然らバ我汝を赦さん』と云ひしに聖ポリカルプ答へて曰く『我基督ニ事ふる事此ニ八十六年なり而して彼に就て唯善事

のみを見たり。爭でか我主我救主を誹謗するを得んや』と。太守は猛獸よ
投じ若くは篝火にて燒き殺すべしと脅せしよポリカルプは毅然とし
て信仰を守り喜色其面よ溢れたり。民は狂ふが如く叫びて『彼は不敬虔
を敎ふる者基督敎徒の父我が諸神を謗る者なり宜く之を獅子よ投ず
べし』と云へり。時よ鬪獸場の演劇の已よ終りたるを報じければ民は又
絶叫て『ポリカルプを燒き殺せよ』と云ひしよ太守は之を諾せり。人民は
直よ薪材木などを積み重ねたりしがエウレイ人は尤も之よ力を盡せ
り。例に由り鉄鎖を以て聖ポリカルプを柱よ縛らんとせしよポリカル
プは其身を縛らざらん事を請ひて『夫の我に燒き殺さるゝを忍ぶの力
を與ふる者は亦必ず鐵鎖なくも我をして動かざして篝火の上よ立つ
を得せしめん』と云ひければ繩にて之を柱よ縛れり。實見者の言ふ所よ
依るに聖ポリカルプの手を背にして縛られたる有樣は獻祭よ供へら

れたる羔に彷彿たりしと云ふ。聖ポリカルプは篝火よ火の移らんとす
る時神に祈禱して神が己を聖致命者の數よ加へたるの恩を謝せり。篝
火の炎々として燃え上るや不思議にも焰は宛ら强風よて卷き立てら
れたるが如く致命者の身邊を圍みて四方よ光輝を放つの狀を呈し芳
香馥郁たりき。

聖致命者の苦難を實見せし者は前記の事實を記し終りに云て曰く
『吾人が萬民の救の爲に苦を受けたるの基督よ背きて他の者を拜む
事能はざるは彼等(即ち異邦人を指す)の知らざる所なり。吾人は神の
子として彼を拜み致命者を以主の門徒及之に倣ふ者として之を愛
し彼等が己の王及び師に志を變へざして順從たるが爲よ愛するな
り。願くは吾人も彼等と俱よする者とならん。后吾人は寶石及び純金
よりも貴き寶なる彼の遺骨を集めて適當の所よ之を藏めたり。彼處

よ吾人ハ機會ある毎ゑ愉快と歡喜とを以て集らん。主ハ彼の致命の誕生日を以て一ハ其の成し遂げたる功績を記憶せんが爲め一ハ吾人の教誨及び信仰の堅めと爲さんが爲め吾人に之を祭らしめ給ふ』

第四　イエルサリムの滅亡

爾の敵ハ爾の周邊に壘を築き四方より圍攻め爾と爾の中の子を擊滅し石をも石の上ゑ遺さゞるの日來らん是れ爾ハ爾を眷顧みたまふの時を知らざれバなり（路加十九の四十三、四十四）

此の耶蘇基督の言が大罪を犯せるイズライリ民に應じたるゑと何ぞ其れ適切なるや。聖殿に於て救主基督が最後ゑ『視よ爾等の家ハ墟なりて遺されん』（馬太二十三の三十九）と云ふの言を聞ける者仍ほ生存せるに其預言せし所の禍至りて國の滅亡を來せり。

猶太人ゑ取りて最を堪え難かりしハ暴君の名ある羅馬帝カリグラ、クラウディイ、ネロンより遣ハされたるの有司なりき彼等ハ瀕々交代し爭ふて殘忍掠奪を事とし猶太の最后の方伯ゲッシイ、フロルゑ至りて其極

ゑ達せり。彼貪婪飽くを知らず安りに財を掠め人を殺し竟ゑイエルサリムの聖殿の寶物に手を觸るゝに及べり。此ゑ至りて人民い舊法ゑ熱心なる「ジロト」黨に敎唆煽動せられ憤怒の餘り自ら防がんと決心し遂ゑ羅馬帝ゑ背き殺氣忽ちパレスティナを蔽へり。是れ實ゑ降生后六十七年の事なり。

是に於てか耶蘇基督の預言せし禍其端を發し天地の間に恐るべき休徵顯はれて其禍の至らんとするを示せり。猶太人の反逆するゑ先ち伊太利及びウヲフィニヤゑ全市を破壞せる大地震起り又預言者アガフの預言せし大飢饉至りて羅馬、希臘、パレスティナの人民餓死ゑ迫れる如き其他疫病の流行國内の騷亂等皆神の大審判の近づきたるを示せり。劍の形を成せる慧星殆ど一年の間イエルサリムの上ゑ現れ夜中聖殿の内の祭壇の傍ゑ奇光輝き空中ゑ車馬軍士の象現れ五旬節の日祭司

の聖殿ゑ入るゑ當り騷然として『此處より去らん』と云へる聲あり基督敎徒をして將に亡びんとするイエルサリムを去りてイヲルダン河の外ペルラの地に避けしめたる如き皆神の審判の應驗（路加廿一）眼前ゑ迫るを知らしめたり。羅馬軍始てイエルサリムを攻めしときは敗北して益々叛民の氣焰を熾んならしめしが子ロン帝は勇將ウェスパシアンをパレスティナゑ遣し四方より大軍をイエルサリムゑ集めたり。子ロン帝崩するに及びてウェスパシアン自ら皇帝と爲り其子テイトゑ至りて全くパレスティナを征服せり。

猶太に叛乱の起りたる報傳いるや羅馬國内の人民は皆起て猶太人を虐殺し殺さるゝ者數万を以て數ふるに至れり。時ゑ大軍猶太の地に臨みて遁るゝゑ途なく屋上に居りし者貨財を取らんとして家に入る時は已に救いるゝを得ず田圃に居りし者い衣服を取らんとして家ゑ歸

るを得ざりき。羅馬人ハ一も假借する所なく其首を刎ねざる者ハ之を
鬻ぎて奴隷と爲せり。遂ヨ「パスハ」の祭ヨ當り二百万餘の人民イエルサ
リムヨ集れる時大軍イエルサリムを圍みたりしかば城中の災難甚慘
を極め糧食忽にして竭き果て人民ハ飢餓ヨ迫り一婦人の如き餓死せ
んとして其赤兒を屠り之を食ふに至れり。時に疫病流行して死する者
甚多く之を葬るの人なく之を葬るの塲所なく一城門の傍に投棄たる
屍十五万ヨ餘れり。自ら城中を遁れて敵の手ヨ投ぜる者ハ皆磔刑ヨ處
せられ城の周圍ヨ猶太人を釘したるの十字架五百本に餘り『彼の血ハ
我等と我等の子孫ヨ歸せん』と叫びし言ハ現ヨ應せり。遂ヨ十字架を造
るの木材も盡るヨ至れり。
ティトハ久しく城を圍み降服を促すも其甲斐なかりければ一擧城を
屠らんと決心し預め兵士に令し美術を以て名高き聖殿を保存すべき

を命せり。羅馬兵遂に城を襲ひ流血汗を漂すの慘劇を演じてイエルサ
リムを防禦げる三重の城垣を破り九十の堡砦を拔きて異教人ハイズ
ライリの神の聖所ヨ入れり。然れども此聖處ヨは已ヨ『荒廢の憎むべき
者』立ちて莊嚴なる聖殿も保存すること能はざるの命運ヨ際せり。羅馬
の兵士ハ偶〻敵の鋭鋒を避けんとして之に燃木を投せしに忽ち聖殿ヨ
燃移りて寶物と共ヨ燒盡しイエルサリムハ全く破壞せられたり。
此後殆と七十年を經過るの間「レウヰト」の詠歌絶え獻祭中絶せしも猶太
人ハ仍ほイエルサリム及聖殿の墟址を恢復せんとするの望を懷きし
が遂に僞「メッシヤ」の出現ヨ惑ハされ復た羅馬に對して反旗を翻し再び
流血の慘劇を演せり。羅馬帝アドリアンハ全くエウレイ民を絶滅せん
と決心し再びイエルサリムを陷れて猶太民五十八万人を殺し全く城
を毀ち聖殿の墟址ヨハ鋤を入れしめたり。是に於て救主がイエルサリ

ムの聖殿を指して『此よ一の石だも石の上に遺らずして皆圮さるべし』（馬太二十四の二）と云へる言ハ全く應せり。イエルサリムにハ新なる名稱を附せられ他國民此よ移りて異邦の神を祭り猶太人ハ永久よ之より遠ざけられて之に接近くおとをを許されず唯一定の日に遙かよ橄欖山より已の先祖の城を眺むる事を許されたるのみなりき。福イエロニム之を嘆じて曰く『此日に禰褸を纒ひたるの老人喪服を着たるの婦人群を爲し辛じて橄欖山よ攀上り山上より壯麗なるアドリアン城よ目を注ぎし時よ、は熱涙眼中より迸り是の聖なる山上よ只慟哭悲嘆の聲のみ聞えたり。而して彼等ハ如此イエルサリムを眺めて泣く事の許を得んが爲め兵士と監守よ賄賂せざるを得ざりき。曾てピラトに迫りて耶蘇基督の血を購ひし者ハ今や其報酬として羅馬人よ涙を流すの許を購ハざるを得ざるよ至れり。噫』

エウレイ民の運命に關する預言ハ此の如くよ應せり。舊約の預言者モイセイの書よ記す所の預言左の如し

汝ハ汝の主神に事へざるに由り飢ゑ渴き且裸よなり萬の物よ乏くして汝の敵に事ふるに至らん（復傳律例廿八の四十七四十八）主ハ遠く地の極より一の民を鷲の飛ぶが如くよ汝よ攻來らしめん是れ汝が其言を知らざる猛惡なる民にして老たる者を顧みず壯き者を憐まず（全上四十五の十）主ハ地の此極より彼極までの國々の中に汝を散し給ハん汝ハ其國々の中よありて安寧を得ざ又汝の足蹠を安んぜる所を得ざらん（全上六十四、六十五）

第五　異教との鬪爭

正教辨護者　致命者聖イウスティン、オリゲン、テルトリアン。

凡て汝等を殺す者ハ自ら神ヨ事ふると意ふ時至らん（約翰十二の二）と云へる救主の言此に應せり。

トラヤン帝の時世の末ヨハ基督教徒に對するの窘逐は殆と止みたり是れ猶太人が羅馬帝國の各地に於て釀せる爭亂ヨのみ專ら其意を注ぎたるが故なり。

トラヤン帝の後任アドリヤン帝ハ窘逐と再興したれども當時猶太人の爭亂尙止まざるを以て皇帝の意亦專ら之ヨ傾き窘逐ハ暫時ヨして

止みたり。アドリアン帝の崩せし后再び告訴拷問慘刑起りしヨ基督教徒は老幼貴賤の差別なく死を以て生と見做し欣喜雀躍して死に就けり。

教會ハ其敵ヨ窘逐せらるゝヨも拘らず益〻進歩擴張せしが異教徒の基督教に對する妄想は朝野の間に猶甚强かりき。殊ヨ異教的の教育を受けたる哲學者輩ハ瀕りヨ新宗教なる基督教を攻め文章を以て之を駁擊し基督教徒の信仰慣例儀式を冷笑し從容死に就くの致命者を目して無智なる狂信者となし人ヨ之を蔑視するの念を起さしめんとせり是に於て異教より歸化したる學士及び有識の士ハ出でゝ教會の爲ヨ辨護せり。彼等ハ充分基督教の眞理を識得し一ハ羅馬政府に對し一ハ異教徒に對して世人の基督教ヨ對して搆造せる讒誣を辨護するの勞を取れり。此の基督教の記者を辨護者（アポロゲト）と稱し其文章を辨護

書(アポロギヤ)と名づく。

其中著名の者ハ哲學者及び致命者たるイウスティン、オリゲン及びテルトリアンなり。聖イウスティン及テルトリアンハ初め久しく異教徒たりしが后ち均しく基督教を奉ト其一身を犧牲として侃々諤々之を辨護せり。

聖イウスティンハ百五年の頃ヨ生れたり。其兩親ハ異教人なりしが故異教徒の間に在りて教育を受けたり。イウスティン學識を積むと雖も心に滿足を覺えず神の事を知らんと渇望せしも哲學の中ヨハ宗教上の問題ヨ對する答辨を得ざりき、されバ其の始めて基督教に意を注ぎし時の熱心ハ恰も基督教徒の勇みて死ヨ就くが如くなりき。イウスティンハ世人の基督教徒を誹謗るを聞き自ら其一理あるを信ト たりしが深く意を注ぎて其事實と探るヨ及び基督教徒ハ啻に死を懼れざるのみな

らず人間の通常恐るゝ所のものを一として之を懼れざるを知り基督教ハ之を信ずる者の心ヨ美妙完全の新なる思想を作り而して其思想ハ獨り學者智者の悟り得べき者たるのみならず謙遜虛心を以てせバ凡庸の人といへども亦能く之を悟り得べく且奥妙なる神の能力たる基督ヨ於ける信仰の爲ヨハ万死も倚辞せざるを知れり。

イウスティンハ其心漸次に啓發けて高尚の眞理を受くる時機の至るを待てり。

イウスティンが自ら其書ヨ記す所を見るヨ彼一日幽靜なる所ヨ於て冥想ヨ耽らんとし渺茫たる海濱を逍遙せしに面識なきの一老人ヨ奇遇せり。此老人ハ威貌凛乎たる間に温厚の風采あり。イウスティン一見敬服の心を起し之と談を交へ時の移るを知らざりしが、老人は終りに臨み謂て曰く往古哲學者輩の未た世ヨ出でざる時聖且義にして神の旨に

適ふの人居れり。人之を預言者と稱せり。彼等は聖神の默示を得て敎を垂れ今已に應ずたる所の事を預言し人ゝ眞理を傳へて自ら名利を求めず聖神に感じて其の聞き且つ見し所の事を言へり。其書今尙存して眞正の哲學者の知るべき所の事を載す…彼等ハ万物の造化者神父を讃美し彼より遣ハされたる其子基督の事を預言せり…汝須く先づ眞神ゝ祈れよ。然らば彼必ず汝ゝ光明の門を開ゝん。彼獨り之を開くを得凡そ祈禱と愛とを以て求むる者に之を開かんとす』と。老人ハ言ひ畢りて飄然として去りイウスティンハ后再び之と會せざりき。イウスティン自ら述べて曰く『時ゝ我が心ゝ俄に火の燃移りし如く預言者及び凡て基督に親近しき人を愛するの心起り此に始めて基督の言ハ悉く眞理を含み其の勢力大にして之ゝ背く者ハ恐懼を懷き之を遵奉する者ハ和平と喜悅を得るを悟れり』と。

イウスティン齡三十歲ゝして聖洗を領け羅馬に學校を開きて己の學識と能力とを傾けて基督敎の爲に盡せり。彼曰く『凡そ眞理を傳ふるを得るの力ありて之を傳へざる者ハ神ゝ罰せらるべし』と。アントニン帝基督敎徒に對して窘逐を起すやイウスティン之ゝ其著名の辨護書を上れり。其書中ゝ曰く

『予ハ寃枉ゝして人々に嫉惡迫害せらるゝ者の爲め卿等(即ち皇帝皇太子元老院及び羅馬人民を指す)ゝ一言を呈し請ふ所あらんとす。世人ハ吾人を稱して無神者と爲す。吾人ハ僞神に對してハ素より無神者なりと雖も公義諸德の父なる潔淨無垢の眞神に對してハ然らず。吾人ハ彼と彼の子幷ゝ預言を爲せる聖神を恭しく崇拜し吾人自ら知れる所の事を知らんと欲する者ゝ公然之を傳へ言と眞理とを以て其敬意を表す。

糾問の時背くと否とゝ吾人の旨にあり。然れども吾人ゝ欺騙を以て生を保つを望まず。吾人ゝ永遠潔淨の生活を望み神と偕ゝせんを欲す。

汝等ゝ吾人が國を望むと云ふを聞きて此世の國を望む者なりと臆測するは誤れり。吾人ゝ神と共ゝ王たらん事を望むのみ。吾人ゝ基督教徒たる事を明言せば忽ち死刑ゝ處せらるゝを知るゝ糾問の際之を白狀するゝ由りて此事明ならん。

吾人が基督幷に其先きの預言者即ち汝等の作者よりも更ゝ古き者より聞きて述ぶる所の事のみ眞理たるを知れ。吾人ゝ彼等と同き事を云ふとて吾人の言を信ずる勿れ乃ち神の獨一の子其家子及能力ゝして神の旨ゝ由り人となれる耶蘇基督の吾人ゝ教へたるの眞理を宣るが故に信ぜよ』

當時基督教徒ゝ到る所危難の境遇に際せしもイウスティンは敢て意とせず公然教誨傳道しければ遂ゝ他の五人の基督教徒と俱に基督教を奉ずるの廉を以て告訴せられ法庭ゝ曳出されて裁判を受けたり。裁判官ルステクゝ徐ゝイウスティンゝ向ひ問ふて曰く『汝學者と稱し眞誠の知識を得たりと思ふ者須く我言を聞け汝の全体を笞ち而して后汝の首を斬るも汝ゝ天ゝ昇ると思ふ乎』と

イウスティン答へて曰く『然り我ゝ基督の約せし所の者を受けんとする信ず何となれば終ゝ至るまで彼の誡を守る者ゝゝ彼必ず慈憐を垂るゝを知れバなり』

是に於てルステクは死刑の宣告を爲せり。刑に處するに先ちて殘酷に笞ち而して后之を斬首せり。信者は聖致命者等の屍を葬れり。

聖致命者イウスティンゝ夙ゝ此の如き致命を爲さん事を望めり。彼屢々

窘逐者ゑ向ひ謂て曰く『汝等我を殺す事を得るも我を亡ぼす事能はざらん』と

オリゲンは致命者レヲニドの子ゑしてアレキサンドリヤに生れ幼より基督教を以て教育せられたり。父ハオリゲンをして幼少の時より聖書の章句を暗記せしめたり。オリゲンハ資性英敏忽ちにして諸學に上達し特ゑ聖書ゑ心を潜め屢々父ゑ向ひて奥妙なる質問を爲し父は其過敏なるを戒めたりしが心窃ゑ驚嘆して斯かる子の父となるを得せしめ給へるを神ゑ感謝せり。

オリゲンは長ぜるゑ及び當時著名の啓蒙學校ゑ通學せり。此時窘逐甚だ烈しかりしが熱心主を愛する少年ハ主の名の爲に致命せん事を望み自ら危難を冒し獄ゑ繫がるゝ者を見舞ひ致命者を刑場ゑ送り高聲其功を讃美し到る所公然基督教徒を辨護しければ異邦人怒りて石を

抛ち罵詈恐喝せし事尠からず。然れどもオリゲンハ遂に致命せず主神ハ之ゑ他の大任を托せんとて守り給へり。オリゲンハ十九歳の時自ら學校を開き業を授けて一家を維持せしが其名忽ち世ゑ現れアレキサンドリヤの有名の人々訪ひ來りて其説を聞くゑ至れり。オリゲンは人ゑ教ふるの傍ら閑あれば自ら講學ゑ耽り著名の哲學者を訪ふて其説を叩き異端者の説と研究せり。オリゲンハ憚る所なく基督教が万世不易唯一の眞理ゑして獨り人の知識を啓發くを得べきものたるを説きしに其説を聞きて基督教を奉せし者多かりき。然れどもオリゲンが畢生の事業となせしものハ聖書研究の一事なり。三十歳の頃エウレイ語を學び當時世に傳はりたる聖書の翻譯を蒐集め精密ゑ之を對照せり。オリゲンは聖書を研究するに謙遜の心と神獨り其智を啓發きて聖書の眞意を解せしむるを得べきを信ぜるの心を以てせり。オリゲンは

聖書を研究すべきを勸めたるアムウロシイに贈れる書の中に謂て曰く

『予は事の危險なるを悟りて久しく聖書を研究する事を辞せしに汝は予をして此に至らしめたり。されば神が予の行と予が如何なる心を以て聖書を研究するの事を任じたるやを試驗する時汝は我が爲に神の前に証者とならん…。神に依らざんば一も善事を爲す能はざ聖書研究の如き殊に然り。故に汝に求む願くは我が爲に吾人の救世主及生れたるの司祭長なる神に由りて万民の父なる神に祈り予を して誤る事なく聖書を研究するを得せしめよ』

オリゲンの文章甚だ多し。古人之を計算せしに短簡なる説教及書簡を合せ其數六千に上れりと云ふ。

オリゲンはデキイの窘逐の時捕へられて獄に繫がれたり。窘逐者はオリゲンをして教に背かしめんとし或は飢餓を以て苦め或は火や鎖を以て之を苦めたるも幼よりして基督に燃るが如きの熱心を顯はせしオリゲンは老年に及びても其名の爲に慘苦を受くるを恐れざ毅然として万苦を受け書を以て基督教徒に諭せり。后獄より放たれしが慘苦に其身大に疲勞せしを以て幾何もなくテールに於て死せり。行年七十歳にして二百五十四年なり。オリゲンは教會史上に金剛者の榮稱を得たり蓋剛勇者の義なり。

テルトリアンは西教會の著名なる作者の一人なり（百五十年に死す）彼は羅馬の百夫長の子にして高尚の教育を受けたりしが天性多情多感なるを以て幼少の時より當時の驕奢淫逸の娯樂に耽れり。然れどもテルトリアンは遂に此世に安心を得ず憂々鬱々たりしが此に始て基督教に就て此世の予ふる能はず又奪ふ事能はざる安和を求めんと欲するの心

を起せり一たび悔悟して其心を神に歸するや其本性の潔白善良なる性質い忽ちよして奮起し常に己の力の微弱なるを確認し祈禱忍耐を以て己の靈魂の救ひを慮り且深く洗禮の功力あるを確信し恐懼と大なる喜悅の心を以て之を領けんと決心せり

かくてテルトリアンは領洗するに及び其の豐富なる天才、卓越せる知慧と學識とを犧牲として之を基督教の務めに供せり。

テルトリアンい有名なる辨護書を著し流暢の文を以て基督教の教理と基督教徒の信仰の高尚なるを說明辨護せり。

テルトリアンい血氣盛んなる時誘ひを斥くる事能いざりし如く老年に及びても誘惑を防ぐ能いず正教會の排斥する迷謬に陷りたり。然れども教會い之を遇する寬大にして其迷謬に陷りたるにも拘いらず之を教會の一師父と見做す。

第六　初代教會の聖堂及奉神禮

聖堂、洞窟、奉神禮、機密の晩餐、祈禱文、齋期及祭日、施濟、遁世者の嘲矢、

基督教の弘布や實に迅速にして彼の富貴の人々の其家族と共に歸化領洗せる羅馬に止まらず遠くエフラト河外のパルヒヤ人及ペルシヤ人に播傳し埃及及ヌミデヤに蔓延し西班牙貌利頓日耳曼に傳いり且つ羅馬の管轄を受けざる野蠻民も亦之を奉ずるに至れり。テルトリアンい第二世紀の末異邦人に對し謂て曰く『吾人い昨日起れり而して今や已に汝等の都府島嶼堡砦村落、汝等の官衙汝等の陣營宮殿元老院公衆の集會所及公園等に充滿し汝等の手にあるものい僅に汝等の神殿

のみ…若し吾人の大衆相率ひて汝等を捨て遠く去りたらんよりも汝等の國土の空漠たるよ驚かん』。

アレキサンドル、セーウェル帝始て基督教徒よ奉神禮を行ふが爲め公然集會するを許せしを以て基督教徒ハ諸所よ公然聖堂を建立し第三世紀よハ羅馬帝國内樞要の都府よハ莊嚴美麗の聖堂起り聖堂の建築法開くるよ至れり。デオクリティアンの即位前四十年の間ハ教會安穩よして基督教徒ハ己の學校を有し公然集會して奉神禮を執行し而して集る者甚だ多きを以て聖堂ハ益〻多く建てられたり。當時聖堂ハ專ら致命者の墓の上よ建てたり。其構造ハ堂前よ玄關を設け此よ重罪を犯して堂内よ入るを得ざる者立てり。之よ次ぎて一室あり悔改者此よ立ちて信者よ神よ祈ることを求め啓蒙者亦此よ立ちて説教を聽聞せり。堂内信者の塲處ハ二席に分ち男女各〻席を異にせり。高座よりして説教し及

び福音を讀み又接手式も此にて執行せり。東よ向けて無血祭を行ふが爲め聖臺を置き其后部よ主教及司祭の席を設けたり。又堂内に献納物を受くる所あり。聖堂の傍よハ廣き洗禮室を設けたり。聖臺ハ常に東よ向けて之を建て以て東方より輝き出る義の太陽(即ち基督)に向ふの意を表せり。

富貴の人々基督教徒となるよ及び聖堂にも自然美觀を添へ第三世紀の初めにハ既よ機密を行ふが爲め金銀製の器物を用ふること習慣となり燈器燭臺の如きも美を極め司祭及び堂役者ハ奉神禮を行ふが爲めに特別の服を着する事となれり。

窘逐再び起るよ及び基督教徒ハ奉神禮を行ふが爲め或ハ舟中に或ハ獄中に或ハ「カタコムブ」と稱ふる地下の洞窟よ集會せり。

「カタコムブ」ハ初代の基督教徒の爲めよ重要の關係を有せしを以て茲

に其大畧を陳ぶべし。「カタコムブ」と稱ふるは羅馬の地中の細長き路にして若し之を直線ゝ延長せゞ凡そ三百四十里ゝ近きほど廣大の場所なり。基督教徒は獨り其暗路を知れるを以て一の「カタコムブ」より他の「カタコムブ」ゝ移り市中より此ゝ避けて窘逐者の手を遁るゝを得たり。

「カタコムブ」の通路ゝ狹く且暗くして其兩側ゝ穿たれたる凹所ゝ即ち人を葬れる所ゝして此の狹き通路ゝ或ゝ彼此相接し十字形を爲して四方ゝ通じ或ゝ所々ゝ廣くして四方形又ゝ圓形を爲す所あり。今日其壁ゝ保存する畫像ゝ由れゞ基督教徒が祈禱の爲ゝ集會せし所を知ること最と易し。此地下の聖堂の重なる所ゝ壁中の凹みたる處なり。此ゝ鐵板を以て蔽へる致命者の柩を置きて聖臺ゝ代用せり。初代基督教徒の手ゝ成れる畫像ゝ多く此の「カタコムブ」の中ゝ發見せられたり。其中ゝ基督を肩に羊を負へる善牧者の形ゝ象れるもの及び秘密晩餐を象

れるもの等あり。古代基督教徒の畫像ゝ多くゝ暗ゝ基督を指示せる寓意的の者ゝして直接基督を象りたるものにあらず例之ば基督の世ゝ現はるゝ事及彼ゝ由りて萬民の救ゝるゝ事を預象せる舊約の事件即ちモイセイが磐を打ちて水を出す所ノイの方舟等の如き是なり。

「カタコムブ」の内に發見せられたるの碑文ゝ依れゞ初代基督教徒等の信仰の厚きと望の堅きと其苦難を受けたるの狀を明かに知るに足る。致命者の屍の此暗澹たる洞窟ゝ葬られたる者其數を知らず今尚新ゝ墓幷ゝ碑文等を發見することあり。是れ皆基督教が當時信者の風俗及思想に一大變革を及ぼせる事を証するなり。異教人ゝ死者の屍を燒き其灰を器物ゝ藏め富貴の人ゝ此器物を美麗なる柩に入れたりしが基督教徒の墓を見れば彼等が全く之と其見解を異にせしを示す。

基督教徒ゝ死者の屍を燒くを快とせざりき。是れ彼等ゝ復活を信じ神

の言に循ひて地より造られたるの體を地に還さんと欲し且身体の内に聖神の殿ありとし祈禱を爲し及び聖歌を唱ひて恭くしこれを墓に葬れり。死者の姓名の傍にハ死者の爵位身分を記す事甚だ稀なり。碑文を見るも畫を見るも皆死后永遠の生活を確信し基督に由りて復活するを喜ぶの意を表せざるなし。致命者の墓にハ棕梠の枝若くハ冠を畫くを例とせり。蓋し勝利を得たるを示すなり。「カタコムブ」の内に發見せる寓意的の像の中にハ錨(基督教徒の望みを表するもの)舟(教會を象どるもの)鳩(ノイに救ハれたることを報せし者及聖神の象なり)魚(ガリレヤの漁夫にて滅亡の深淵より救ひ出されたるの靈魂若くハ水即ち洗禮にて新生命に更生したるの靈魂を象どれり)等あり魚の像ハ最も多く發見せらる何となれバ魚の像ハ寓意的の意味を含むの外に希臘の原字に依れバ此語中に耶蘇基督神の子、救世者といへる救主の名稱の頭

字を含むが故なり。此意味ハ異教人の知らざる所なるも基督教徒等ハ常に之に由りて耶蘇基督に由り救贖せられて新生命に更生したる事を記憶して此寓意的の象を用ふるを好めり

初代教會の奉神禮の順序及び慣例ハ一は使徒行傳及び使徒の公書に由りて之を知るべく其詳なるものは使徒の徒及び基督教の辯護者イウスティン幷にテルトリアンの書に由りて明なり。使徒等ハ初めて公衆相會して祈禱するの順序を制定し其教訓及び規則の教會に傳ハりたるものハ初代三世紀の間に之を編纂して使徒規則及び規律と稱ひ諸教會之を重んじて遵守せり、右の外近世に至り第一世紀若くハ第二世紀の著作に係る使徒の教訓と稱するの謄本を發見せり此書にハ古教會に於て祈禱及び機密を執行せる順序を記載せり

使徒等ハ主の命に由りて凡そ信せし者に其罪を赦すが爲め父及び

子及び聖神の名に由りて洗禮の機密を行へり。此機密い信者を新生命
よ更生して之を基督の血にて贖いれたる基督教徒の社會よ入るの記
号となれり信者よ洗禮を授くるよ先だち之に基督教の大意を説明せ
り。之を啓蒙と稱す。啓蒙終りて信者い其信仰を表せり。之が爲にい初め
一定の法式なかりき。其一例を擧んよ使徒フィリップの説を聞て教に歸
したるエフィオピヤの貴人は己の信仰を表するに『我は耶蘇基督の神の
子たるを信ぜ』との言を以てせり。然れども后よ至り信仰を表する一定
の法式を定め皆之よ從がいしめたり。洗禮い父及び子及び聖神の名よ
由りて三次水中よ沒むるの式を以て行ふを例とし之を以て舊人を葬
り其の罪の爲よ死して新なる生命よ更生したるを象どれり。領洗に先
だち一日若くい二日齋みするを例とせり。洗禮い小兒よも之を授けた
り。凡そ領洗者よい其洗禮にて受けたる心靈の潔白を表するが爲め之

に白衣を着せ且つ新生命よ更生せし幼稚の者として之よ蜂蜜及び牛
乳を飲ましめたり。
使徒等は洗禮を施せし后按手を以て信者よ聖神の恩寵を授けたり。例
へバサマリヤ人い基督を信じて洗禮を領け後ちペトル及イヨアンが
祈禱して之よ按手するよ及び始めて聖神を受けたり。又エフェスに於け
るアポルロスの門弟も使徒パウェルの按手に由りて始めて聖神を受け
方言を解せり后に至りて(使徒の規律よ見ゆるが如く)領洗者よ聖よし
たるの膏を傅けて之に聖神を傳ふるの制を定めたり。此膏を聖にする
ものよとは主教の行ふ所なりき。傅膏機密と稱ふるもの即ち是なり
主耶蘇基督が秘密晩餐の席に於て麵包を擘きて門徒よ聖体機密を授
けたる時より麵包を擘くよとは基督教徒に取りて基督及びゴルゴファ
の献祭を記憶し幷に基督の体血を領する機密と相離るべからざる神

聖の事となれり。初代の基督教徒社會に於ては信者は共に集り其産を共有し家毎に歡喜と誠心を以て麵包を擘き以て神を讃美せり（使徒行傳二の四十六、四十七）信者の增加するに從ひ此の如く祈禱して麵包と葡萄酒を食ふ事は機密の趣意及び効力と有し使徒パウエルの如き明かに『我等が降福する所の交際の杯は是れ基督の血の交際にあらずや』と云へり、此の如くに麵包所の麵包は是れ基督の体の交際にあらずや我等が擘くと葡萄酒を降福する事は最初には日々各人の家に於てせしが后信者の增加するに從ひ一定の日に公なる晩餐に於て行へり。之を愛の晩餐若くは主の晩餐と稱せり。富有者は此の晩餐に要する物を携へ來り而して其餘分は貧窮者之を携へ歸れり

晩餐の時の降福は初め祈禱を以て之を行ひしが漸次聖体禮儀なる特別の一儀式に化せり。聖イウスティン（第二世紀の人）は之が最初の儀式を

詳述す即ち聖書を讀むこと、聖詠及び其他聖歌を唱ふること、說教すること、機密を行ふが爲め携さへ來れる麵包と葡萄酒に神の降福を求むるの祈禱を爲すこと、基督の言と唱へ聖神を顧び降福しつゝ聖賜を聖にすること聖賜を信者に分つこと等なり。補祭は聖賜を携へ往きて病者及び奉事に與かることを得ざる者に予へたり、機密を行ふに先だち信者は互に相接吻して安を問ひ以て衆基督教徒の一致和合親密なる互ひの愛を表せり後世此の風習の廢せられたるは意ふに信者の會するもの甚だ多くなりたるが故なるべし。然れども今に至るまで機密を行ふに先だち『相愛し心を一にして父及び子及び聖神の一体として分れざる聖三者を讃揚ん』と云ふの言は之が記憶として存せり

基督の体血を領する事は頗る重大の事と見做し豫め之が準備を爲し痛悔機密を以て其罪を告白し良心を潔めざれば之に近づくを得ざる

事と爲せり使徒パウェルは領聖するに先だちて自から省るべきを諭せり（哥林多前書十二の二十八）重罪を犯せし者ゝ暫く機密ゝ加はる事を得ざりき

神品機密ゝ使徒等兩禱と共ゝ手を按するを以て之を行へり此機密たるや使徒等は主が之ゝ向ひて『父の我と遣ゝせし如く我も爾等を遣ゝす』と云ひ之ゝ氣を噓きて『爾等聖神を受けよ爾等が釋す所の罪は釋され爾等が繫ぐ所の者は繫がるべし』（約翰二十の二十一乃至二十三）と云ひ以て之に授けたるの權を被選者に傳ふるものゝよして實ゝ重大の機密なりき使徒等が其門弟ゝ已の權を傳ふる時は常に聖神の勸めゝ從ひて行へり

使徒の公書及び使徒行傳に記する所ゝ據るゝ當時の教會ゝ主教司祭補祭の三の神品職ありしことは明かなり基督より親しく此權を受けたるの使徒等ゝ神の教會を牧するの力ありと見做せし者に其權を傳へて之を主教と爲し而して司祭及び補祭を立るの權は之を主教ゝ委

ねたり補祭は自ら機密を行ふの權を有せゞ唯之を行ふ時ゝ役事し或は說教し或は貧者及病者のことを慮れり

婚配を行ふ者は預め教會に公然之を告げ主教の降福を受け而して後配偶せり使徒が夫婦の義務ゝ付きて述べたるの教を見れば初代の基督教徒が如何ゝ高尙ゝ此機密を尊重せしやを知るに足る

基督教會は異教徒の蔑如せし婚配に重きを置きて基督と教會との結合に象どりて行はるゝの機密となし之に降福するを以て獨り此世のみならず永遠の世ゝ至るまで之を聖にせり第二世紀の作者テルトリアンは同一の信仰同一の希望及び同一の務めを以て結合せられたる夫婦の配偶の神聖なるを形容するの言なしと云へり其言ゝ曰く『彼等は偕ゝ祈り偕ゝ齋し互ゝ相扶け偕ゝ聖堂に詣り偕に主の晩餐に與かるを視る彼等は誘惑ゝ於て窘逐に於て慰藉ゝ於て相偕にし偕に貧者

を顧み窮乏者を助け施濟を行ひ偖よ祈禱し唱歌を以て神を讃美す。故よ基督は彼等を見彼等に聽き喜んで安和を以て之を祝す。二人の間に斯かる膠漆の交ある所よは彼自ら居りて惡魔は之に入るに由なし。』

聖傳機密の事は使徒イアコフ之を明言す曰く『爾等の中誰か病める者あらば敎會の長老を招ぐべし彼等主の名に託りて其人に膏を沃ぎ之が爲よ祈らん。それ信仰より出る祈禱は病者を救ふべし主之を起さん若し罪を犯しゝことあらば赦されん（雅各五の十四、十五）傳膏を以て病を醫せしことは福音書よも明記す。彼の福音を傳ふる爲め主よ遣はされたるの使徒等は多くの病者よ膏を沃ぎて之を醫せり（馬可の十六、十三）

聖使徒行傳の書よ依るよ使徒等は福音傳道の爲め旅行を企つるよ先だちて齋を爲し既に敎會を立つるよ及び復た信者と共に祈り且つ齋せり。耶蘇基督自ら齋を以て神の悅ぶ所の事なりと明言せり。故よ初代

の基督敎徒は屢〻齋を守れり。パスハ祭前の四旬大齋幷よ水曜日金曜日の齋の如きは使徒の時代より存せり。

基督敎徒の行ふ所爲す所は一として異敎徒の目に新規ならざるなし彼等は救主基督の新なる誡を以て異敎社會に入れたり即ち『我新なる誡を以て爾等よ與ふ爾等互に相愛すること我の爾等を愛せしが如くすべし爾等互よ愛を有せば人皆之よ因りて爾等の我が門徒たるを知らん』と云ふの誡なり。初代の基督敎徒は后世の敎會よ活潑有爲なる相愛の模範を遺せり。

基督敎徒は病者を顧み貧弱の者を助け病院の如き養育院の如き皆始て基督敎徒の手よりて成れり而して其補助獨り同宗の者よ及ぶのみならず不信者よも之を及ぼせり。且當時敎を弘布する事よ關し又は相愛的の事業を行ふ事よ關して其力を盡せしこと多きものは殊に婦

人なり。使徒パウエルは其書中に多くの婦人の名を記し彼等の諸教會に功勞あるを證せり。初世紀より女補祭と稱ふる婦人の特別の職教會に起れり。此女補祭なる者は初め特に品行の方正と善を行ふに熟心なることを以て其名を知られたる六十歳以上の寡婦の中より撰抜したりしが后に至り終身童貞を守るを約せし處女又は夫あるも一家の係累なきものに此務を執るを許せり。使徒は家族を有する婦人に子女の教育を慮り能く其家を治むるを以て首要の務となす可きを勸めたり女補祭等に病人のことを慮り新に教に歸するの婦人を教誨し其領洗の時之に事へたり。

初世紀より隱遁者なる者出でたり。隱遁者とは主を愛するよりして嚴格なるの生活を爲し妻を娶らず節制を守りし者なり。埃及に於て聖使徒マルクの門弟は其行の嚴格なるを以て稱せられたり。彼等は幽靜寂

寞の所に隱遁し世の名利及び娛樂を棄てゝ齋を守り祈禱を爲し聖詠を歌ひ聖書を讀みて日を送れり。古の一學者は彼等の生活の狀況を詳かに記すの間に彼等が神を榮するが爲に詠歌を作れること及彼等が大祭日の前に集會祈禱せし事を明記す。

基督教徒等は窘逐なき時には日々集りて祈禱せり。テルトリアン謂て曰く『我等は祈禱の爲に集りて皇帝の爲め其諸大臣の爲め總ての有司の爲め全世界の安寧平安の爲め天地の破壞より其害を免れんが爲に祈る。我等は相集りて吾人の心を照らし吾人に必用なるの勸諭教訓を垂るゝの聖書を讀む。而して此聖なる言は吾人の信仰を養ひ望と活潑にし信任を堅ふし吾人に規律を示して吾人の間に秩序を固定す。此集會に於て或は勸告し或は人を罰す。凡そ罪せらるべきものは我等神の名に由りて之を罪に定む而して我等の裁定には大なる力あり。何とな

れば吾人い神の在ます所ゑ於て之を行ふを知るなり。故ゑ凡そ吾人に交際を絶たれ祈禱ゑ與かるを得ざる者ゑは吾人の審判は彼の恐るべき審判の預象となるなり』

祈禱の集會ゑ於て奉神禮式漸次ゑ成り立ち就中第三世紀に至り信者の數增加して聖堂を建築し修道院の起りし時より完全のものとなれり。現時行ふ所の奉神禮式は其要点皆初代教會の例ゑ基くものなり。教會の祈禱文の中初代教會ゑて採用せし處の者多し例之ば『主憐めよ』の歌の如き『聖なる哉聖なる哉聖なる哉主サワオッ爾の光榮は天地ゑ周し』と云へる神使の歌の如き『アリルイヤ』と云へるヘルウィムの歌の如き天ゑは神の光榮顯はれ地ゑは平安降り人に惠は臨めり』と云へる神使の歌の如き即ち是なり。此等の歌は當時諸教會ゑて採用し早課奉事の時之を唱ひしこと殆ど現時吾人の唱ふるが如くなりき。『光榮は父と子

と聖神に歸す』といへる讃美歌の如きも使徒の時代亦常に之を唱へたり。第二世紀の初に書きたるものは此言を以て終結せり。又『我が靈は主と崇め』云々と云へる神母の歌及捧神者シメオンの歌の如きも最初ゑ奉事の儀式中ゑ入れり。基督教徒等は聖詠の外舊約の歌の中エウレイ人の奉事式ゑ採用したるものを用ひたること亦少からず。唯舊約の歌い其の中ゑ言ひ含められたる預言預象此時已に應じたるゑ由り其趣意更に高尚となり人亦其意味を了解するゑ至れり。例之ばイズライリ人が紅海を濟れる后作りし歌、サムイルの母アンナの歌、巴比倫の三童子の歌の如き是なり。

舊約教會の大祭い基督教徒も之を守りしが彼等い之ゑ特別高尚の趣意を付せり例之ば「パスハ」祭の如き初めイズライリ人が埃及の奴役ゑり救脫せられたる事の記憶たりしが基督教徒は之を以て信者が基督

の血よりて罪と死の虜より救われたる事を記憶するものとなせり。此の基督の復活祭ゝ最も悦ぶべき事件を記憶するものとして之を祭れり又西乃山の麓にて律法を賜ゝりたる事を記憶せし五旬節ゝ聖神の使徒より降りし時より其趣意更より高尚となれり。又日曜日ゝ基督教徒に取りてエウレイ人の安息日の代りとなれり。又祈禱及び奉神禮を以て救主の此世より於て行ひし重大の事件と記憶する事ゝ初代より正教會の慣例となれり。十字架を畫く事ゝ古代の記者の言ふ處よして基督教徒ゝ事と始め及び終る時常に之を畫きたり。現時奉神禮の時行ふ處の寓意的の記号及舉動例之ば帽を脱して聖堂より立つ事、東より向ふ事、叩拜する事、幷に膝を屈めて祈る事等も亦皆初世紀の諸父の書より明記する所なり。

第七　窘逐、聖致命者及び致命女

デヲクリティアンの時の大窘逐。致命者聖ペルペトヤ　ヘリチタダ　ゲヲルギイ　セワスティアン　ポタミエナ　ゲヂス　アナスタシヤ　ワルワラ。基督教を窘逐せし皇帝。

我の爾等を遣すゝ羊を狼の中より入るが如し故に智きこと蛇の如く質直なること鴿の如くなれ（馬太十の十六）身を殺して魂を殺すこと能ゝざる者を懼るゝ勿れ（馬太十の二十八）爾等は世より在りて患難を受けん、されど懼るゝ勿れ我已より世に勝てり（約翰十六の三十三）

主ハ此言を以て詳ヨ致命の狀態を預言せり。

羅馬皇帝の中チロン帝ハ始めて基督教徒を窘逐し其后に至りてハ有司の意見と皇帝の性質ヨ由りて窘逐ヨ寛嚴あり或ハ基督教徒を窘逐する甚殘酷なる者あり或ハ自ら殘酷ヨ過ぐるを恐れて稍〻之を寛大にする者あり又或ハ全く基督教徒を放任するものありき。此の安穩の時代ヨ於て基督教徒ハ聖堂を建て暫く慘苦を免かれ以て更ヨ殘酷なる窘逐ヨ遭遇するの準備をなせり。

デオクリティアン帝の時の窘逐ハ最も殘酷を極めたり。

デオクリティアン帝ハ廣大なる羅馬帝國を統御するの便を計り之を二分して自ら其一半を管理し別ヨマクシミンを立てゝ一方の皇帝となし又別ヨ各執政を置きて其政治を助けしめたり。マクシミン帝の執政をコンスタンチイ、プロールと云ひデオクリティアンの執政ハガリレイ

とて頗る基督教を嫌惡せし人なりしが遂ヨデオクリティアンヨ基督教徒を讒誣して叛逆を企つる者、王權及び國教を蔑視する者、放火及其他の犯罪を行ふ者と爲し大に之を惡むの情を起さしめたり。是ヨ於てデオクリティアンハ期を定めて基督教徒の聖堂を毀ち以て基督教を絶滅せんと決定し三百三年の二月廿三日異教の大祭日ヨ此苛酷なる詔を發し俄に兵を遣ハしてニコミデヤの聖堂を破壞し次で筆紙ヨ盡す可らざる殘忍の窘逐四方ヨ起れり。當時の人之を目擊して『縱使我ヨ百の口あり鐵の胸あるも我は尙信者の忍び受けたる慘苦の種類を列擧するを得ざらん』と云へり。其殘酷の甚しき一たび傷つけたる者を醫して再び之を苦め一所ヨ於て一日に男女老幼を問はず其の苦めたるもの十人乃至百人の多きに至れりと云ふ。史家エウセウヰイ曰く『我之を目擊せしヨ刀劍鈍りて折れ創手疲れて交代するヨ至れり』と。エギペトシリ

ヤパレステナ小亞細亞、亞弗利加、伊太利等東西到る所新築せられたる聖堂ハ毀たれ聖書ハ燒かれ致命せし者其數を知らず。

此窘逐時代の致命者及び致命女の勝て數ふべからざる中より茲ニ其數人の例を擧げん。

カルファゲンヨ於てハ聖致命女ペルペトヤ及びヘリチタタ幷ニ聖致命者サトルニン苦を受けたり。彼等ハ恰も洗禮を受けんとせしとき捕へられて裁判所ニ曳き往かれたり。ペルペトヤハ富貴の家の寡婦ヨシて此時二十二歳なり、其母基督教徒なるを以て之に正教を教へたり。ヘリチタタハ其侍女なり。ペルペトヤが自ら糾問の頗末と獄中の記事を書遺せるものあり。其父ハ異教人なりければ裁判官と俱ニ切に之に基督ヨ背くべきを勸めしかど其父の歎願も裁判官の脅嚇も其甲斐なかりけり。

糾問ハ數日間打續きしが信者ハ此間ヨ洗禮を受くるの機會を得て益々其熱心を增し神ヨ祈りて其名の爲ヨ萬苦を忍び受くるの力を賜はん事を求めたり。かくて幾何もなく皆獄に繫がれたり。

聖致命女獄中の狀態を記して曰く『妾ハ甚だ懇けり妾ハ未だ曾て斯る恐るべき暗黑の所ヨ居りし事なし。四人の多きに由りて息苦しきと獄吏の待遇の殘酷なると赤兒の爲ヨ心を腦ましたる等當時の苦難實ヨ形容すべからぞ』と。信者等ハ番兵ヨ賂賄して年若き致命女の待遇を寬かヨしければペルペトヤハ此機に乘じ其子に乳を與へんとて之を獄中ヨ入れたりしが、其子を懷きて喜の餘り覺えず叫びて『今や獄ハ妾が爲に宮殿となれり』と云ひしとぞ。時に其年老いたる父ハ來りてペルペトヤの前ヨ跪き懇ろヨ基督教を棄つべき事を勸め其手に接吻し涙ヨて之を濡しつゝ『汝ハ我の白髮を憐めヨ我をして人ヨ辱を受けしむる

勿れ。汝の母と兄弟と愛子を視よ此子ゝ汝なくして生育する能ゝず』と云ひしかばペルペトヤゝ目よ言ふよ言ゝれぬ悲哀の涙を湛へつゝ父の面を打眺めたりしが遂に信仰を易へず一向父の憂愁を和げんと努めたり、ペルペトヤ曰く『父上よ悲み給ふ勿れ。萬事神の好み給ふが如くならん。我等の運命ゝ已に因るにあらず神の旨よ因るのみ』

ペルペトヤゝ公開の糾問の事を記して曰く『多くの人々ゝ妾等を觀んとて集へり、やがて妾等を曳き往きて小丘き所よ立て先づ妾の朋輩を糾問し始めしが順を追ふて妾よ及びける時父ゝ妾の哺乳兒を懷き來り妾を傍よ招ぎて此兒を憐めよと云へり太守も又妾よ向ひて汝ゝ汝の父の白髮を憐み汝の兒を惜み皇帝の萬歳を祝ひて獻祭せよと云へり妾答へて能ゝぎと云ひしよ然らば汝ゝ基督敎徒なりと云へり父ゝ如何よしても

妾を捨るよ忍びぎと見え絶えぎ妾よ敎に背くことを勸めけるよ太守ゝ命ゝて之を蹴仆して鞭たしめたり妾は之を見るに忍びぎ父を打たぎして寧ろ妾を打たばやと思へり。遂よ太守ゝ猛獸に投じて食ゝしむべしと宣告しければ妾等ゝ欣然として獄よ歸れり

刑を受くる三日前よへりチタダゝ獄中よ於て分娩し痛く產苦よ腦みければ獄吏ゝ之よ向ひて『汝ゝ今斯く腦めり猛獸汝を嚙裂かば如何よぞや』と云ひけるよ致命女ゝ之に答へて『今妾ゝ單獨にて腦み苦痛よ堪ねずして叫ぶも彼の時よゝ妾一人苦を忍び受けずして妾が信ずる所の者ゝ妾を堅むべし』と云へり。

遂よ凱戰の日至り致命者を獄より曳出して鬪獸場よ至れり。彼等ゝ恰も祝祭よ赴くが如くにして行きしがペルペトヤゝ首を垂れ自若として徐歩み往きけるよ衆目之に注げり。

かくて刑場に至りけるにペルペトヤ及びヘリチタダの衣を剝ぎて殆んど裸體にし之に網を纏いしめけるに人民い其酷なるを訴へて之に衣を服せしむべしと促せり。斯くて猛りたる牛を放ちけるに牛い角にてペルペトヤを突き遠く之を拋ちければペルペトヤい起ちて再び猛獸に當らんとし急ぎ寸裂したるの衣にて裸体を蔽ひ乱れたる髪を束ねたり。致命女自ら述べて『是れ致命者い凱戰の榮を受くるが爲に喪服を衣る者の如く其姿を乱さゞして裝飾せざるべからざるが故なり』と云ふ。ペルペトヤい傷を受けたるも其身の苦痛を忘れ仆れたるフェリチタダを起し鬪獸場の中にて優しく懷き合ひしかば見る者頗る感動し刑吏に迫りて之を刑場より引出さしめたり。されども后復其餘の者と俱に二女を鬪獸場の中央に引出し無殘にも劒にて之を突き殺せり。王の寵愛を獲たる壯年の一軍士ゲヲルギイと稱する者頗る感ずる所

あり侃々として偶像を崇拜するの理なきを痛論しければデオクリティアン命じて痛く之を拷問し基督に背くべきを諭せしも其信仰を翻さず神い此年若き基督教徒を助け奇蹟にて其傷を醫し之に奇蹟を行ふの力を賜へり。異教人い此の神の異能の顯はれたるを見て驚き基督教に歸せし者多かりき。デオリクティアンの妃アレキサンドラは神の異能を見て驚き自ら基督教徒なりと揚言し刑に處せられんとせしが劒の首に觸るゝに先だちて其靈魂を神に托せり。年少の軍士ゲオルギイい遂に刑に處せられ正教會い之を大致命者凱旋者ゲヲルギイと稱して大に頌讃す

又一年少の軍士セワスティアンと稱ふる者あり。宮殿の守衛を司るものなりしが基督教徒等の繫がれたる獄を巡視りて之を勵まし其功を頌讃せり。偶〻兄弟の者あり基督教を奉ずるの故を以て刑に處せられん

とするに當り両親と妻の涙を垂れて泣き悲ひを見心を動かして教ゑ背かんとしければセワスティアン之を勵して信仰を堅ふせしめ且多の人を説き基督教に歸せしめて遂ゑ自ら矢ゑて射られ痛く鞭たれて致命せり時に之と共ゑ致命せし基督教徒甚だ多かりき

年若き下婢ポタミエナといへる者あり容貌頗る美なりしが其主人ハリストス基督教を奉ぜるものなりとて之を告訴しけれバ殘酷に之を苦め遂ゑ沸騰たる油釜の中ゑ徐かゑ之を入れたり其拷問せらるゝ時之を見る人民ハ處女を詈りたりしが一軍士ワシリドと稱ふる者ポタミエナの忍耐と温柔の厚きゑ感じ力を盡して之を怒り狂ひる民の侮辱より防ぎければポタミエナハ深く其恩を謝し死ゑし后主ゑ彼の救の事を祈らんと約しけり。其后程經てワシリドの同僚ハ偶々之ゑ誓を爲すべきを促しけるゑ基督教徒なるを以て誓を爲す能ハずと答へたり。同僚ハ

之と信せず戯るゝならんと思ひしゑワシリドハ其の基督教徒なる事を確言せしかバ之を裁判所に曳き往きしゑワシリドハ裁判所ゑ至りても已の基督教徒たる事を證しけれバ裁判官ハ命ドて之を獄ゑ繫がしめたり。基督教徒等ハ之を聞きワシリドを訪ふて其の俄に教ゑ歸せし所以を尋ねしゑワシリドハ之ゑ答へてポタミエナハ其刑に處せられたる后三日を過ぎて之ゑ現ハれ其首ゑ冠を戴かしめて妾が約せし如く主に祈りたれバ汝も基督の名の爲めゑ死すること近きにあらんと告げたりと云へり。ワシリドハ獄中にて聖洗を受け間もなく刑せられたり

此ゑゲチスといへる俳優の不可思議ゑして教ゑ歸せし感動すべき談あり。ゲチスハ演劇にて基督教徒を嘲笑せしが皇帝及び人民を歎バしめんとて基督教の機密を行ふの狀を演ドけるゑ人皆其技の巧なるゑ

驚嘆して哄笑せり時よ神の恵みに由りて恩寵の光ゲヂスの靈魂よ觸れければ彼忽ち聲を揚げて『我信ぜ我ゝ洗禮を受けんと欲す』と云へり看客ゝ信ぜずして哂ひけるよゲヂスゝ信仰することを確言し同業者よ向ひて我ゝ決して戯るゝにあらず基督教の眞理を知りたれば洗禮を受けんと欲すといへり。此よ於て俳優ゲヂスを皇帝の前よ曳き往きけるよ彼復基督を信ぜる事を公言し基督教の機密を喇りける時一神使顯ゝれて我が犯せる罪を錄せる書を洗禮の水よて洗ふの異象を見たりと告げ基督教徒とならんと欲すと云へり。之を諭すも又ゝ脅すも苦しむるもゲヂスゝ其心を動かさずして遂よ刑よ處せられたり

又アナスタシヤと稱ふる婦ありて強て殘酷疎暴なる夫よ嫁せられ墓なく此世を送りしが或時『我獄よある時爾ゝ我を顧みたり』と云ふの聖言を聞きて深く感動し當時羅馬の幽暗き牢獄に繫がれたる不幸の基督

教徒等を憐み日々獄中を見舞ひけるよ皆喜び神使となして之を迎へたり

夫ゝ之を聞て大に怒り其家財を四人の爲よ費さん事を恐れ之を一室に幽閉めければアナスタシヤの失望言はん方なく曾て己の師たる老人よ書を以て『御身願くは妾の爲よ神よ祈り玉へ妾ゝ神を愛するが爲め今苦みて斃れんとす』と云ひ贈りける老人ゝ之よ答へて曰く『彼の水を歩みし基督が如何なる颶風をも靖むるの力ある事を忘るゝ毋れ彼起きて風と波とを禁めければ止みて平穏よなれり（路加八の二十四）汝ゝ今怡も激浪の間よ立つが如し。宜しく忍耐して基督を待てよ。彼必ず汝に來らん。凡そ暗黑ゝ光よ先つものにして死の后よゝ生命あり。此世の悲哀ゝ此世の樂みと均く必ず其終あり。凡そ神よ望を屬する者は神よ祝福せらるべし』

幾何もなく聖アナスタシャン餐となりければ其好む所の事と財産を抛ち已の生命をも之が犧牲と爲すの自由を得たり。されば彼ン獨り羅馬の獄を見舞ふのみを以て足れりとせず諸國諸邑を偏歴して四人と衣服飲食を施し其傷を洗ひ獄吏と厚く賄賂し之をして四人の身と傷を負ンせたる鐵鏈を解かしめたり。此故と聖アナスタシャン械擊を解く者と名づけらる。

アナスタシャの愛と由りて懲を得アナスタシャの勸と由りて死に至るまで忍耐するの力を得たる者は實と夥しく彼ン日夜勞して自ら苦に遇ンんとするをも知らざりき。一日アナスタシャン前日と見舞たる四人を見舞ンんとて獄と往きけると其四人ン前夜皆刑に處せられて一人も居らざりければ太く泣き悲しみ涙を垂れて『我が友なる四人ン何處と居るや』と叫べり。人々ン之と由りて其の基督教徒なるを知り之

を捕へて裁判所と曳き往けり。かくてアナスタシャン四本の柱の間と繫がれて燒き殺されんとせしが未だ火の燃え上らざる內苦痛に堪えずして死せり。

造物主ン吾人と美妙を愛するの念を賦し而して森羅萬象ン絕對的美妙即ち神の現象なるが故と吾人ン森羅萬象を見れば以て美妙の感情を充たすと足る。森羅萬象ン吾人をして奧妙的に有形物と由りて無形物と觀察するを得せしむ故と凡そ虛心平意の者ン森羅萬象を見て其心を森羅萬象の美妙の指示する在天の喜びと傾くると至るなり。年少の一處女ワルワラが此在天の喜びに心を傾けたる感動すべき物綽あり。ワルワラン絕世の美人なりしが父デオスコルン之をして親族幷と朋輩に交らしめず之と一人の女教師と數人の侍婢を附け之が爲特更と一の高樓を造り何一つ不足なく飾り立て之と住ンせ何人たりとも

其靜肅を妨ぐ可らざる如くせり。ワルワラの住居せる高樓ハ高山の上にありて四方眼の及ぶ限り言ふよ云ハれぬ絶景なり。ワルワラハ常ヨ好みて窓の傍に坐し默々として神の造物を眺め其靈魂ハ靜肅の間ヨ於て養ハれたり。太陽の光、月の廻轉、無數の星宿、又ハ鬱蒼たる田野森林馥郁たる花の如き、天地の奇觀ハ恰もワルワラを招くが如く而してワルワラハ之を見る毎ヨ其心戰慄せり。

遂ヨワルワラハ已の敎師と侍婢ヨ問ふて『此等のものを造りし者ハ誰なるか』と云ひけるヨ皆答へて『我等の神なり』と云ひければ深く嘆きて再び問ふおとを爲さざりき。一日常の如く窓の傍ヨ坐して天を眺むること稍久くして此の茫々たるの天と際涯なき不可思議の穹蒼を造りたる者ハ誰なるべきか』と思念しつゝありしが俄ヨ其心に言ふに云ハれぬ喜びを感ずたり。恩寵の光ワルワラの心に觸れて悟を開き造物ヨ

由りて造物主を知れり

ワルワラハ此よりして速ヨ神の敎を領會せんとするの一事ヨのみ其心を傾けたりしが何人ヨも交ハる事能ハざりければ就きて敎を受くべき人なかりき。ワルワラハ最と潔き鴿の如く遙かに世と遠ざかり獨り高樓ヨ棲みて世俗の事にその心を染めざ日ヨます〳〵萬物を維持し萬物を生活し萬物を照管する活神の已ヨ近づくを感じたり

遂ヨワルワラが始めて耶蘇基督の名を聞くの好機會到れり。偶々其父ハ遠國に旅行せんとて出立しけるゆゑワルワラハ高樓より下るの便を得たりしが此時基督敎を奉ずる婦ヨ遇ひて基督敎の敎理を聽きければワルワラハ此ヨ始て其の夙ヨ心ヨ感せし新生命のあるを悟りて其の喜び譬ふるに物なく直に其敎を奉ずたり。此時偶々アレキサンドリヤより來れる司祭ありければワルワラハ之ヨ就て密ヨ洗禮を領け

以て他日苦難よて火の洗禮を受くるに已を備へたり

幾何もなくワルワラの父ハ其愛孃の基督教を奉じたるを知り怒ること甚しく此の潔白なる處女をして慘苦を受けしむるに至れり。ワルワラハ己を苦しむる者の爲よ禱りつゝ此世を去りて己の主の喜に入れり。聖教會ハ十二月十六日よ聖大致命女ワルワラを記憶し之を讃美して左の如く謳歌す

喜べよ、ワルワラ潔き鴿よ
喜べよ、爾は造物に於て恰も鏡よ於けるが如く造物主を見たればなり、
喜べよ、爾は造られたるの星に於て造られざるの光を見たればなり、

當時基督教徒の相愛と彼等が何人を問ハず衆人よ對し限りなき惻隱慈憐の心を以て顯ハせし所の愛情ハ異教世界よハ未曾有の事よして之をして頗る驚愕せしめたり饑饉疫病の如き天災の行ハれたる時よ

於て此愛の効力ハ特更顯ハれたり異教人ハ其最も近しき者と雖も餓死せんとし若くハ疫病に罹る者あれバ之を打棄て顧みざりしよ基督教徒ハ世人と倶よ苦痛を忍びつゝ身を犧牲よして之を介抱せり。然るに羅馬政府ハ此の如き輩よ對して窘逐を起し彼等の爲よあらゆる拷問慘刑を發明せり

三百五年の五月一日にデオクリティアンハ帝位を退き其后數年の間ハ互に相爭ふて羅馬の帝位に登れる者六人あり。其間基督教徒の狀態ハ主權者の性質に依りて同じからざりき。貌利顛(今の英吉利)及ガルリヤ(今の佛蘭西)地方を治めたるコンスタンチイ、フロールハ異教人なるも基督教徒を敬ひて隱よ之を保護せしが東方よ於てハガレリイ殘酷の窘逐を爲し遂よ神罰を蒙り恐るべき病に罹りて死するよ至れり。ガレリイハ病よ罹るよ及び始めて已の行の非を悟り驚きて窘逐と中止し

基督教徒は公然其教を信奉し聖堂を恢復するを許すの詔を發し其詔の末は妄信的の恐懼心よりして基督教徒は已の病の癒るを祈らん事を乞ふの言を添えたり

ガレリイの死せし后殘忍暴逆はして妄信は耽れるマクシミンハガレリイの詔を廢し更は烈しき窘逐を起せり。之と同時は西はマクセンティイハ亞弗利加及び伊太利は基督教徒を窘逐せり

斯かる間は基督教をして大勝を得せしむるの事件漸く熟し將來基督教徒の保護者となるべきコンスタンティンハ日は益々勢力を得たり

第八　コンスタンティン大帝

コンスタンティンの履歴及其の教に歸ずる事。信教容忍の詔勅。　コンスタンティノポルの創設。　東西教會の狀態

異教世界ハ火と劍とを以て基督教に敵し全く之を地の面より一掃せんとせし時に當り神ハ已の教會の爲は羅馬帝の中に之が保護者を起せり。亞使徒コンスタンティン大帝即ち是なり。コンスタンティンの父母ハ基督教を奉せざるも夙は基督教の主旨を知り熱心は之を保護せしを以てコンスタンティンも幼時より異教的の妄信を擯斥して竊かは基督教は心を傾けたりしに神ハ自ら種々の方法を以て漸次に之を潔らし

て己の光榮の選ばれたる器となせり。

コンスタンティンの父、コンスタンチイ、フロールが基督教徒を好遇して異教徒よりも之を重んじたる事の如き其母エレナ及姉妹コンスタンチヤの基督教に歸せし事の如き、當時基督教徒を窘逐せしに由りて國内の騷乱絶えず且つ之を窘逐せし諸王が恐るべき病に罹りたる事の如き基督教會が窘逐の間に在りて毅然として動かざる事の如き又一方に基督教徒の溫柔なる事と其の負擔せる職務に忠實なる事の如き夙にコンスタンティンをして異教を擯斥し福音の教を奉ぜるの心を起さしめたり。史家エウセウヰイの言ふ所に依るにコンスタンティンは羅馬をマクセンティイの暴逆より救脫せんとし伊太利に兵を出すに先ち其父及已に屢々現はされたる神の佑助と無心の偶像に徒に助を求めたる羅馬國の末運と窘逐者の天罰を蒙りたる事等を思念し熟思勘考

して遂に實在せざる神を妄信し此の如く明白なる証あるにも拘はらず迷謬を固執するの無智なるを確認せり是に於て彼は己の父の尊奉する神を崇敬せざるべからざるを悟り乃ち其名を顧び其の自ら現はれて己の事を諭し前途の事業に向ひて其全能の手を假さん事を祈れり

此のコンスタンティンの祈禱は百夫長コルニリイの祈禱の如く聽納れられ主は直に之に現はれて其心を慰め其の當に爲すべき所の事（十行傳六十の三節）を示せり

エウセウヰイ曰く『王は熱心に祈禱を爲して之を求むるに當り神より驚く可き休徵を得たり。王自ら言ふ所に依るに一日夕陽將に西に沒せんとする時『汝之を以て勝てよ』(in hoc vince)と記せる十字架の太陽の中に光を放ちて現はるゝを見たり。王は之を目擊し兵士亦之を見て驚きたりしがコンスタンティン自ら惑ひ是の現象は果して何の

意ぞやと思惟する間よやがて夜となれり。此夜基督神ハ夢に其の曾て目撃したる十字架の休徴を以て顯ハれ之に均しき軍旗を造り之を以て敵の攻撃を防ぐべきを命せり。翌朝コンスタンティンハ醒め起きて左右の者よ其秘密を語り直ち工匠を召して之ゑ軍旗の雛形を示し純金と寶石とを以て之ゑ似たる者を造るべきを命せり

コンスタンティンハマクセンティとの戰ゑ於て始て十字架の記號の勢力の強勢なるを實驗せり。マクセンティの軍ハコンスタンティンの兵に數倍せしにも拘ハらず一戰直ゑ敗北してマクセンティハテーブル河に溺死せり。是ゑ於て羅馬ハ始て其城門を十字架の旗の前ゑ開けり

マクセンティ死してコンスタンティン獨り西の獨裁君主となりしが恰も此時東方に於てハマクシミン帝死してリキニイ君主となれり

コンスタンティンハ已の軍をして大勝を得せしめたる天の佑助を衆人

に知らしめんと欲し羅馬府の中央ゑ一大標柱を建て之ゑ聖旗を翻へし其上ゑ此旗は羅馬帝國及國中の保護者なりと記せり

此后コンスタンティンハ詔勅を發し始めて國民ゑ信教の自由を公布し異教徒ゑハ依然其敬神の儀式を行ふの權利を予へ基督教徒ゑハ獨一の眞神を崇拜するを許し且之ゑ聖堂を建つるを許し窘逐の時ゑ沒取したるものハ悉く之を還し贈與若くハ購買ゑ依りて之を得たる者ハ國庫の金を以て之を償ひ萬事ゑ於て基督教徒ゑ對するの好情を表せり。コンスタンティンハ基督教徒と親しく交際するに從ひ彼等が律義正直ゑして國の忠臣たるを知り又一方にハ窘逐者が恐るべきの死を遂げたるを聞き且自ら異象を目撃し十字架の記號を以て大勝を得たる等に依りて基督教徒の奉ぜる神の能力の大なるを確信するに至れり加之ならぜコンスタンティンハ國政上よりして德義の力を以て帝國を

一新するを得べきものゝ異教ゝ非ずして基督教なるを悟れり。故にコンスタンティンゝ未だ洗禮を領けざりしと雖も頻りゝ聖書を研究し屢々主教を招きて之と談話し其勸告を入れ長子の教育の如き之を基督教徒に委ねたり。當時發布せられたる勅令を一讀せバ基督教の感化の著しきを見るゝ足る。コンスタンティンゝ磔刑を禁じ鬪獸場の殘酷なる流血の遊戯を廢し日曜日を祭るを命じ孤兒及び棄兒と保護養育し奴隷の境遇を寛大ゝし異教徒の棄てゝ顧みざる貧者及不具者を矜恤せり。基督教徒ゝ數十年間の慘憺たる窘逐の后茲ゝ始めて安堵の思を爲し到る所に聖堂の修復又ゝ成聖式行ゝれ、隨在讃美歌及び感謝の祈禱の聲聞こ、主教ゝ公然集會して教會の事を議し、時としてゝコンスティン自ら其集會ゝ臨み宗教ゝ關係するの問題に意を注ぎたり。コンスタンティンゝ聖役者ゝ異教の神主と均く一切他の職務及租稅を免じ

之をして全く神の務めに一身を犧牲ゝすることを得せしめ、窘逐者の奪ひたる墓所及其他の地所ゝ皆之を教會に還し且つ之ゝ奉事を行ふが爲め「バシリク」と稱ふる廣大の建物を與へたり。此の建物ゝ當時裁判所と爲れる所ゝして其内部の構造ゝ聖堂に改造するゝと甚だ容易なりき。コンスタンティン自から聖堂の建築に大金を寄附し莊嚴美麗なる聖堂ゝ諸方に起れり

史家エウセウ井イがテイルに建てられたる聖堂の摸樣を細ゝ記載せしもの吾人ゝ傳ゝれり。其記事ゝ依るゝ入口ゝ甚だ廣くして、四方ゝ大なる柱を廻らし、中央ゝ墳水器を設け、聖堂ゝ高柱及精巧を極めたる彫刻物を以て飾り、大理石と敷詰め、柏香木を以て其外部を覆ひ、堂内ゝゝ階段を設けて聖所と祈禱する者の立つ所とを別ち、聖臺の后に主教及司祭の坐を設け、堂の兩側にゝ洗禮室及堂役者幷ゝ痛悔者啓蒙者の室を

設けたり

西に於てゝ基督教徒等此の如くコンスタンティンの保護に由りて大平を謳歌せしもリキニイの統御せる東方の狀態ゝ全く之と其趣を異にせりリキニイゝ夙に基督教徒を憎みしが獨裁君主と爲るに及び百方力を盡して之を迫害し其管下に於ける基督教徒の狀態ゝ年々益々困難を極めたり

エウセウビイ曰く『二分せられたる羅馬帝國ゝ恰も晝夜に分たれたるが如し。東方に住する者ゝ夜の暗きに蔽ゝれ而して一方の人民ゝ晴天白日の光に照されたり』と。此の如き有樣なるを以てリキニイとコンスタンティンとの交際ゝ圓滑なる能ゝず漸く激して公然相爭ふに至れり。此の爭ゝ羅馬帝國に於ける基督教の運命を一決すべきものとして兩帝共に各其信仰に應じて一大戰鬪を開くの準備を爲せり。占者ゝリキニイ

に勝利を得べきを預言し基督教徒ゝコンスタンティンの爲に勝利を祈れり。神ゝ遂にコンスタンティンに勝を得せしめ(三百二十三年アドリアノポルの戰に於て)リキニイゝ王位と生命とを失ひコンスタンティンゝ獨裁君主となりて基督教徒ゝ凱歌を奏せりコンスタンティンゝ勝利を得たる后東方の基督教徒にも彼等が西に於て享有せる權利と同等の權利を得せしめんとし先づ聖堂を新築改修し州長にゝ專ら基督教徒を選擧し皇帝の名を以て偶像に献祭する事を禁せり。且つコンスタンティンゝ諸州長に訓令を發して基督教の眞理及勢力と異教の荒誕無稽なるを証し以て其の基督教に對する感情を表せり。彼ゝ主に其意を向け呼んで曰く『大なる神よ、今我爾に求む、願くゝ東方に居る爾の民に矜恤愛顧を垂れ給へ、我爾の役者に由りて諸州長に平癒を賜へ…我ゝ爾の導きに由りて救の大業を創め且つ終れり

我ゝ到る處に爾の旗を翻して連戰連勝を得苟も國家の危急ゑ際せバ常ゑ此の爾の能力の記号を以て敵ゑ向へり。故ゑ我爾ゑ愛と恐懼とゑ經驗を經たる我が靈魂を托せり、蓋し我ゝ誠心爾の名を愛し爾が多くの事實ゑ於て我に示し我が信を堅め給へたるの能力を崇敬す…我ゝ爾の民をして安寧泰平の樂を得せしめ又彼の迷信者をして信者と均しく安和平穩の樂を得せしめんと欲す蓋し此の如く一致共同を回復する時ゝ人を眞理の道に導くを得べけれバなり爾が自ら爾の聖法の下ゑ安息せしめんとして召す所の者のみ聖淨潔白の生活と爲さん、唯之を避くる者ゝ爾若し之を欲せバ依然其僞敎を固執す可し…何人たりとも人を妨害すべからず已の知り得たる事ゝ若し能くす可くんバ他人の爲ゑ之を利用すべし、若し能くせずんバ之を措て可なり、蓋し自から好んで不死の爲ゑ戰を爲すと刑罰を以て强らるゝとゝ其事固よ

り同じからざれバなり』

當時羅馬ゑゝ異敎の風習慣例等猶多く遺存せしを以て公然基督敎徒を保護せるコンスタンティンゝ自然羅馬人の愛を得ざるが故舊都ゑ駐在すること甚だ稀ゑして且つ之を好まざりき。是を以てコンスタンティンゝ毫も異敎の風習ゑ染まざる基督敎的の新都會新羅馬を創立せんとせしがボスホル海濱に在る小邑ウザンティヤの形勢ゝ頗る其意ゑ適するより之を選んで羅馬帝國の新首府となし自ら巡視して遠く線を引き區劃を定め直ゑ大厦高樓の築造ゑ着手しけれバ莊麗なるの宮殿水道、混湯、劇場等起りて新都府ゑ美觀を添え、又更に希臘、伊太利及び亞細亞地方より美術品を蒐集せり。新都府ゑゝ異敎の諸神を祭るの堂を建てず彼の奴隷の鬪爭并ゑ遊戲を演せし鬪獸場の代りに競馬場を立つるを命じ、奴隷の流血の遊戲及び鬪爭ゝ基督敎的の新都府ゑ於て嚴

禁せられたり。基督教の莊嚴なる聖堂多く築造せられしが其中最も著名のものゝ神の睿智（希臘語にてソヒヤと云）に献せられたるの聖堂なりき。新都府ゝ至聖生神女に献せられコンスタンティノポル若くゝ王城と稱せられたり

第九　第一全地公會

アリイの異端。ニケヤ公會の召集。アフアナシイの辨論。ニケヤの信經

コンスタンティン一たび基督教に歸化せしより窘逐せられたるの基督教は變じて凱旋的の宗教となり基督教會ゝ其外面平穩無事に樂みたりしが内部は然らず使徒時代より其芽を崩せる異端即ち信仰個條に關するの僞教ゝ蔓延して其説を異にする者互に相敵視するに至れり教會の師父并に各地方の公會は此僞教を責め之を罪せしも全基督教會よりは未だ教の正邪を區別するの標準たるべき眞正の正教は安くあるやを宣言せられざりき

コンスタンティン帝の時代に當りて教會に新異端アリイ派なる者顯れたり。アリイはアレキサンドリヤの司祭にして銳敏の人なりしが自ら其智と學識とを以て傲り自己の考案を以て聖三者の事に關するの說を作り耶蘇基督は神父と一体にあらず無始ものにあらず即ち神父に造られたるものにして其の有らざりし時ありとの說を立て之を主張したり。アリイにして若し傲慢名譽を好むの人にあらざりせば此迷說はアリイの一私說たるに止り敎會に爭亂を引起すが如き事なかりしならん。アリイはアレキサンドリヤ敎會の主敎たらんと預期せしに神品及び人民は彼を選はずしてアレキサンドルを撰擧せり。アレキサンドルはアリイが傲然邪說を唱へ神を謗讟するを聞き驚きて之を諭せしにアリイは之を意とせず反て己と說を異にするものを以て異端者なりとし主敎の裁判に從はざして益々其說を擴張せり。是に於てアレ

キサンドリヤに公會を設けてアリイを罪せしもアリイは之に從はざ埃及パレスティナ等に已の異端を流布し俗歌を以て巧に之を民間に播傳せり。アリイ自ら其肥滿したる魁偉の容貌と活潑なる擧動を以て滔々雄辨を揮ひ頗る人心を感動し其說に從ふもの多く忽ちにして全東方に其說を廣めたり。到る所神品のみならず民間に於ても主耶蘇基督の事に就きて激烈なる爭論起り異說の徒相反目して鬪爭血を流すに至れり。主敎の中アリイの說に惑はされて之に與するもの亦多かりき此の如くにして人類救贖の理即ち全基督敎を顚覆するに至るの恐るべき異端日に益々勢力を得たり

コンスタンティンは東方を巡視するに當りて西方に於て概ね人の未だ知らざる宗敎上の爭論紛々たるを聞き且つ憂ひ且つ怪みたりしが初め單に之を一時の爭論に過ぎざるものと見做し調和を圖らんとして

アレキサンドル幷ニアリイニ書ヲ遣ハシ平穏ニ爭論の局を結び已の意を安んぜん事を諭せり。コンスタンティンハ此書中に於て全世界ニ唯一の政治唯一の宗教を布きて之を統一するを以て己の責任及び一生の目的と自認する事を確言せり。曰く『我ハ多年の戰爭ニて攪乱せる西方より神光の發輝せる東方ニ來るニ當り快然たる希望を懷きしニ豈圖らん此地ニ於て醜聞は我が耳否寧ろ我が心を刺激せんとハ汝等宜しく空漠たる爭論を棄て心を翻して唯一一般の教理ニ一致せよ。汝等宜く我が日を靜謐にし我が夜を安穏ニし我をして慨嘆涕泣の代りに光明と喜樂とを得せしめよ』

コンスタンティンハ當時西方諸教會の最も尊敬せる牧師ニして己の親友及び其顧問たるコルドワの主教オシヤニ此書を齎しアレキサンドリヤニ至らしめしが此時異端の蔓延せし事甚だ盛んニして既ニ之を

調和するの期を失せり。オシヤハアレキサシドリヤに至り會議を設けアリイの説を聞きて諸主教と共ニ其僞教を罪定せしニアリイハ敢て讓らざりき。然れども救主基督の無始無終き事と其神性を具ふる事ハ永く之を信者の相爭ふ疑問となすこと能ハざるを以て全教會ハ己の代表者を會して基督及び其使徒の教會に傳へたる教理を叙述するの必用起れり。是ニ於てコンスタンティンハウヰフィニヤ州の首府ニケヤニ全地公會を開きて基督教國の諸主教を召集せんとするの念を起せり此時ニ至るまでは未だ曾て全地公會を召集せしことなく且つ之と召集せんとするも能はざりしが今や一大帝國が基督教を奉ぜる國王の權下ニ一統せられしを以て始めて召集せらるゝを得るの時機到れり此の如き國王は全國民ニ異儀なく公認せらるゝ首權の代表者として獨り能く天下の主教を召集するを得たり。是ニ於てコンスタンティンは

諸主教より召集狀を發せり

主教は召集に應じて諸國よりニケヤに集れり。旅費と滯在費い皇帝之を支辨せり。招集に應じて會せし主教は埃及、パレスティナ、シリヤ、メソポタミヤ、亞弗利加、小亞細亞、希臘、波斯、アルメニヤ、ミジヤ、ダキヤ等の主教幷に聖教に歸せしより日尚淺き多腦河外のゴット人の主教等にして總計三百十八人あり。其他之に隨行せし司祭補祭の如き神品亦多かりき當時アリイの異端は西方には殆ど未だ傳はらざるを以て西方より主教の來る者最も少なく羅馬の主教シリウエストルは老年なるを以て自ら來る能はず己の代理として二人の司祭を派遣せり。來會せる主教の中より基督教社會に行の潔白なると智識の高尚なるを以て名を知られたるあり奇蹟を行ふの異能を賜はりて神に榮せられたるあり又は窘逐の時慘苦を受けて基督の名の爲に被りたる名譽の創痕を帶

ぶる者多かりき

始めてアリイの僞教を駁し使徒の教を保護せしアレキサンドリヤの主教老年のアレキサンドルも此公會に臨みたり。其隨行者の中に壯年の首補祭アファナシイなる者あり。後に此人毅然撓まずアリイ党と戰ひて其名を顯はせり

公會に臨める有名の人を擧ぐればパリキヤ郡ミラ府の大主教ニコライあり。窘逐の時多く苦を受け不可思儀よしてリキヤ教會を牧するに召されたる人なり。ニコライは高德の人にして普く困苦する人を憐み奇蹟を行ふを以て其名を輝せり。又キープル島のトリミフントの主教スピリドンあり行の潔白なると奇蹟を行ふを以て著明なる人なり。又ニジビヤの主教イアコフあり隱遁の功を積み奇蹟を行ふを以て著名なり。又遠方のフィワイダよりパポタムモン及びパフヌーティの如き有名

の隱遁者來れり

斯くて公會ハ宮殿の廣間ニ於て開かれたり。實に三百二十五年の六月なり。列席者ハ司祭補祭を合せて二千餘人あり其中主教三百十八人あり。圓形に順を追ふて主教司祭の椅子を併列し中央ニ寶座を設けて其上ニ聖書を置き之を以て公會の決議の標準とすべき眞理の確實なる証となせり。已ニして衆員相會するニ及び皇帝ハ金銀寶石を以て飾れる最も美麗なる王衣を纒ひ一も兵器を帶びたる護衛兵を從へず只基督教徒よりなれる侍從ニ伴はれ威儀堂々として會ニ臨めり。コンスタンティンハ容貌嚴肅快活ニして自ら王者たる相あり。會員中にハ未だ曾て皇帝の面を見ず帝王たる者の威嚴を目擊せざる遠方の人多かりしを以て之を見て愕けり。皇帝も又教會の有名なる牧師、嚴格なる勤行者不屈不撓の表信者幷ニ正教の爲に萬苦を受けたる致命者の列席する

を見て心ニ驚き默然として恭しく備へられたる玉座ニ近づき立て主教の已ニ座を與ふるを待てり。ケサリヤの主教エウセウヰイ立て歡迎の辭を述ぶるやコンスタンティン自ら會員に向ひて一場の演說をなし此の如く諸主教の嚴肅なる集會を見て歡喜ニ堪ゑざるの意を述べ和衷協同以て其爭ふ所の問題を裁決せん事を請へり。終りニ臨て曰く『神ハ我を佑けて窘逐者の邪なる權勢を挫かしめたり。然れども我ハ神の教會に於ける內部の鬪爭を以て凡百の軍流血の戰鬪よりも最も憂ふべき事とす且つ其害亦計る可らざるものあり』

東西ニ正教の確然不易の法を立てたる大全地公會の開會の狀ハ此の如くなりき

アリイハ頑然已の說を辨護し公然其說を贊成せし主教十七人ありて正教を維持する輩ハ熱心之と論爭せり。就中アレキサンドリヤの主教

と共に來れる壯年の補祭アフナシイに滿場の注目する所となれり。其雄辯には何人も及ぶ者なく論鋒鋭くして能くアリイ黨の論據を挫けり。コンスタンティンは両涙をして和衷協同の決議を爲さしめんとし百方力を盡せしも其甲斐なく論爭久しきに亘るに從ひアリイ黨が正教の眞理に背む事益々明白となれるにも拘はらずアリイは一歩も讓らず遂に其僞説は公然罪定せられてアリイは其の若干の徒と倶に追放せられたり

公會は一大爭論を決定し終りて他の問題を議するに着手せり。「パスハ」祭期の問題は是時に至るまで未だ一決せず猶太の「パスハ」と仝時に之を祭るの教會も少からざりき。是に於て公會の諸父は諸教會仝時に「パスハ」を祭る事を決議し即ち春季等分后の第一日曜日に於て祭る事とせり。公會の議決の嚴なる所は總て人間の劣弱なるを酌量する基督教

の愛の精神を以て之を和げたり。主教の中神品の妻帶を禁ぜる説を提出せし者ありしがフィワイダの主教表信者パフヌーティは痛く之を反駁し自ら獨身者たるも神品一般に必ずしも無妻たるべき責任を負はしむるの必要なしとし使徒パウェルの言を擧げて婚配の貴きを証せしに其説遂に勝を得たり

コンスタンティンは會を散ずるに當り諸主教に對する訣別の辭を以て之に和合一致すべき事を勸めたり。此辭は今日に至るまで教會に取りて貴重のものなり曰く『汝等謹て派を立て互に爭論する事を避けよ。何人たりとも特別の智慧を顯はせる主教に對して嫉妬を懷く事なく各人の德を以て全教會一般のものと見做すべし。高位高德の者は卑き者を蔑視する勿れ人の優劣を知る者は獨り神のみ。完全無欲は世に甚だ稀にして劣弱なる兄弟は之を寛容せざるべからず凡そ大事に非ざる

ものは宜しく之を宥免し人性の薄弱なるを酌量すべし。和衷協同はゞ貴きものあらず。不信者を救へよ學術上の議論を以て何人をも敎へ歸するを得べしと思ふ勿れ誠に眞理を愛する者い甚稀なり。吾人は宜しく醫士に倣ひ彼の病症ゑ應ト て藥劑を投ずる如く各人の種々の意思ゑ應じて敎を說かざる可からず』

此の如く公會は基督敎の定理の大本たる神の子救主基督の藉身の定理を確定し一大事を遂げ終りて散會せり。普世敎會の信仰い滿場一致を以て左の如く言顯いされたり。之をニケヤの信經と名づく

我信ぢ唯一の神父全能者、天と地及び總ての見ゆると見ゆざる萬物を造りし主を、又信ず唯一の主耶蘇基督神の獨生の子無始より父に生れ、光よりの光、眞神よりの眞神、生れて造られしゑ非ぢ、父と一体、萬物彼にて造られ、我等人々の爲め、幷ゑ我等の救ひの爲ゑ、天より降り

聖神及び童女マリヤゑ由りて身を藉り人となり、我等の爲ゑポンテイピラトの時十字架ゑ釘うたれ、苦を受けて葬られ、第三日ゑ聖書に符ふて復活し、天ゑ昇りて父の右に坐し、光榮を顯いして生ける者と死せし者を審判するに復來り、其國終り無からんを。又信ぢ聖神を

第十　コンスタンティン帝の治世の續き

聖后エレナ。聖十字架の發見及之を舉ぐる事。聖ニナイウェリヤ及其他の地方を教化する事。コンスタンティンの領洗及崩御。聖アファナシイに對するの窘逐及アリイ黨の跋扈

アリイの異端ハ公然ニケヤの公會ヨ於テ斥けられたれども其傳播甚だ深く且つアリイ又全力を盡し盡々其説を主張して止まざるを以て尚久しく教會に爭亂を釀せり

救主基督の降誕生活して苦難を受けたるの地ハコンスタンティンの版圖内にありしを以て基督教を奉ずる皇帝ハ常ヨ其地ヨ意を注ぎたり

しが全地公會を召集するに先だち熱心敬虔なる皇太后エレナをして聖地ヨ到らしめたり

此時福音の事蹟を以て著明なるの場所ハ皆既に荒廢に歸し異教徒ハ基督教を惡ひよりして其場所の紀念をも消滅せん事を務めたり。基督の墓の洞窟は土を以て之を埋め其上に偶像堂を建てゴルゴファ及びウ#フレエムの洞窟の上にも異教の神像立てり。エレナは命じて堂を毀たしめ偶像を倒し洞窟より土を堀出さしめたり。後ちコンスタンティン帝は命じて其側ヨ基督の復活の紀念ヨ供する聖堂を建て且つイエルサリムの主教マカリィ及びバレスティナの知事ヨ命を下して充分壯麗に聖堂ヨ裝飾せしめたり。其他橄欖山、ウ#フレエムの洞窟幷ヨ主がアウラアムヨ現はれたりしマウリヤの樫樹の下にも聖堂を建てたり

敬虔なるエレナは救主基督の釘せられたる十字架を發見せん事を熱

望し種々手を盡して之を搜索せしゝ漸く地に埋沒れる三箇の十字架を發見し又其傍ゝ罪標をも發見せり。然れども此三箇の十字架の中孰れか果して救主の十字架なるやを識別するに苦しみたりしが主教の勸めゝ依り一病婦を携へ來り其身ゝ交々之を觸れしゝ主の十字架ゝ觸るゝや其婦の病忽ち愈ゑ又墓地ゝ葬送せらるゝ死者ゝ此の生を施すの聖架に觸れて蘇生せり。此奇蹟ゝ因りて疑團全く解けゝれゞ聖架を高丘ゝ立てけるゝ基督教徒は之を拜し欣喜雀躍して主憐めよと呼べり。異教人及び猶太人の之を見て基督を信せし者多かりしと云ふ尊貴ゝして生を施す十字架を擧げたるは實に三百二十六年なり。正教會は今に至る迄毎年九月二十六日ゝ此事件を記憶す。エレナゝ聖架の一部分と釘とを携へ歸りて其子コンスタンティンに與へたり。殘りの部分は銀の箱ゝ藏めて之をイエルサリムゝ置き毎年大金曜日ゝゴルゴ

ファゝ出して衆人に叩拜せしむるを例とせり

此時他ゝ又教會の爲ゝ喜ぶべき事件行はれたり。基督教の光は遠隔の地イウェリヤ(現時のグルジヤ地方)及エフィオピヤゝ傳はれり。神はイウェリヤを教化するが爲め纖弱なる婦女を用ひ給へり。ニナと云へる一少女ありカパドキヤの生れゝして幼にして孤となりイエルサリムゝ來りて親戚の家ゝ寓せり。ニナ基督の聖蹟を見て救主基督を愛する心燃起つが如くなりしが當時イウェリヤゝゐ猶太人多く移住しけれゞ仄かゝ其國情を探知して該國の未開暴戾の民を基督教ゝ歸せしめんとするの念を起せしにイウェリヤの首府ムツヘタゝ曾てイウェリヤ人たる兵士が闔ゝ由りて獲たる主の上衣を藏せりとの事を聞きて益々其念を强うせり。時に主ゝ夢にニナゝ顯ゐれて此聖業に從事すべきを告げたりしが后奇蹟を見るゝ及びて其信を堅うせり。一日神の母ゝニナゝ顯ゐ

れて之より降福しイウェリヤより傳教するの任を托し葡萄の枝よりて造れる十字架を以て之より與へたり。ニナ此十字架を携へて路より上りしに主い又之より顯いれて其の倦みたる心を勵まし其手より福音の言を記せる卷物を與へたり。其初にい『我誠より爾等に告ぐ世界の中凡そ此福音の傳らるゝ所よりい此婦の爲せし事も其記憶の爲めに述べらるべし』(馬太二十六の十三)との言及び『爾等往きて萬民より教を傳へ父と子と聖神の名より由りて之より洗禮を施せ』(仝上二十八の十九)との語あり。ニナい仝行者と俱にエフェスに到り此處より皇妃リプシミヤ及有志の友五十人を獲て(デオクリティアンの窘逐の時此處より遁走せる人々なり)之と共にアルメニヤを經てイウェリヤに至れり。ニナいイウェリヤに至るに及び其潔白なる行と病者を愈せる奇蹟とに由りて其名忽ち顯れ四方より病者を携へ來る者ありけれバニナ之を醫し一も報酬を受けずして唯己の事ふる神の子耶蘇

基督を感謝すべしと告げたり。此后ニナい主の道を傳へ基督を信じて救贖を受くべき事を勸めけるに其說を聞きて敎に歸する者多くニナの風評い遂に王宮に達せり、偶々王妃病に罹りけるにニナい基督の名を呼びて之を癒しけれバ王妃之を信じ后又王ミリアンも聖敎に歸化しニナの勸めに從ひコンスタンティン帝に使を遣いして主敎及び司祭を遣いさん事を請へり。かくてアンティオヒヤの主敎聖エウスタヒイい三百廿六年イウェリヤに至りて信者に洗禮を授け此地に主敎を立てたりしが后幾くもなくして聖堂も建てられたり。此後ニナい尙多年使徒の勞を取りカヘテン州に聖敎を播傳し老年に及びて死せり。グルジヤにていい今に至るまで聖敎化女の名を尊び毎年一月二十六日に之が記憶祭を執行す

エフィオピヤ(一名アビシニヤ)にはフルメンティイ及びエデッシイの二少

年教を傳へたり此二少年は航海の途中端なく破船してエフィオピヤに漂着し國王及人民に始めて基督の事を傳へたり。其中一人は后聖アファナシイに由りてアビシニヤの最初の主教と立てられたり。コンスタンテン帝の時代にタウリヤ半島(即ち今のクルイム半島)にも聖教の播傳せしといふ傳あり

コンスタンティンは皇太后エレナの崩せし後姉妹コンスタンチヤと親みしがコンスタンチヤは夙よアリイ黨と惑はされければ死と臨みて皇帝にアリイの處刑の不正なるを告げアリイ幷と之と共と流竄とせられたる者を赦免し教會を安穩とすべき事を勸告せり。之に由りてアリイは返され又アリイ黨の有力なる反對者アファナシイの敵ニコミデヤの主教異端者エウセウヰイも之と共と返されたり

是より先きアファナシイの名聲既に四方と轟きければアレキサンドル

は死するに臨みてアファナシイの若年なるにも拘はらず之を擧げて己の後任となさんとせしと神品等は一同異議なく之を選びてアレキサンドリヤの主教と立てたり當時アレキサンドリヤは羅馬に次ぎて最も繁盛の一都會なりしを以てアレキサンドリヤの主教には「パパ」の尊稱を與へられ且つニケヤ公會の時より『普世の審判者』の稱を與へられたり。アファナシイは主教の任を受けたる時より死するに至るまで正教の保護者となり當時皇帝の愛顧を得て勢力強盛なるアリイ黨派と反抗せり。アファナシイは基督の神性を排斥したるのアリイを以てアレキサンドリヤ教會の司祭の位に恢復する事を斷然拒絶しけれバコンスタンティンもアファナシイを尊敬し敢て強ひざりき。アリイ黨は到底アファナシイを已の黨に傾くる事能はざるを悟り且つ其の常にアリイ派の說と擧動の正理と背くを譴責せんとするを知りて之を亡さんと決心

せり

アリイ黨は多く僞証を撰造して皇帝に訴へ遂に其承認を得てティルに己の黨を集めて公會を開き以てアファナシイを罪に陷れんとせしに公會に於て其告訴の僞りなる事暴露れて其事破れたり然るにアリイ黨の激昂甚だしく皇帝はアファナシイを救ふが爲めガルリヤ(現時の佛蘭西)のトリールに之を流竄せり

此に於てアリイ黨い勝を得て益々宮中に勢力を占めケサリヤの主教たる自派のエウセウヰイをしてイエルサリム教會を管理せしめ當所の復活聖堂成聖式の爲に集れる主教等はアリイを教會に受くる事を決議せり。皇帝はアレキサンドリヤにアリイを遣はせしに民大に騷擾し教會は拒んで之を受けざりければ皇帝はアリイをコンスタンティノポルに招ぎ主教アレキサンドルを列せしめて自ら其說を詰問せしが遂

にアリイの巧辨に欺かれて其翌日アレキサンドルにアリイを教會に受くべき命を下せり主教アレキサンドルは王命を遵奉するに苦み深く悲みて神に祈禱し己を亡すか若くはアリイを亡さん事を求めしに其祈禱空しからざりき。アリイ党はアレキサンドル若し甘じてアリイを受けざんば腕力を以て之を教會に入るべしと脅かせしに基督教徒は唯祈禱を以て武器と爲し齋を爲して主に己の教會を守護し給はん事を祈れり。當時コンスタンティノポルに居れるニジビヤの聖イアコフも正教徒と俱に憂を同うして祈禱せり

翌朝日曜日にアリイ黨は其首領を擁し之を伴ふて聖堂に入らんとし其行列頗る盛んなりしがアリイは途にて俄かに不快を感じ他に避けて頓死せり。之を聞く者驚かざるなかりき。蓋し人爲の方法皆既に無効となれる時に當りて此の如き事ありしは是れ實に神が其全能力を以

て教會を恐るべきの僞教より守りたりと見做さゝるを得ざれバなり此事の起りたるは三百三十七年の「パスハ」祭の前日なり。是より先きコンスタンティンは即位三十年紀を祝ひ將ゑパレスティナに赴きイヲルダンの聖水ゑて洗禮を受けんとせしが此事遂に成らざりき。軈て「パスハ」祭至りければ例年の如く盛大に執行せんとて市街到る處ゑ高燈を点ド煌々として暗夜猶ほ白晝の如く終夜人々聖堂ゑ集りて祈禱し曉に及びて皇帝ハ基督復活大祭の祝ひとして人民に施をなせり。コンスタンティンがコンスタンティノポルに於て盛大ゑ此大祭を行ひしハ之を以て最后となす。幾何もなく病に罹り醫士の勸めに從ひて温泉ゑ浴せしも更に快愈を得ざ自ら死期の近つきたるを知りてニコミディヤの離宮ゑ趣き諸主教を召して洗禮を授けん事を請へり。コンスタンティンの時代並ゑ其后尙久しき間洗禮を延引するの習慣ありたり。是れ或者ハ己

の罪を認めたる謙遜の情と大機密を領くるゑハ數年間祈禱痛悔を以て之ゑ備ふるを必要なりとする敬虔の情よりし又或者ハ俄かに從來の行爲を改め神靈的の新生活ゑ更生するの決心を爲すの難きゑ依れり。是れ殊に教會が領洗后行ひたるの罪を處するゑと甚だ嚴重なりしが故なり。信者ハ洗禮ゑ由りて罪を清めらるゝを信ト寧ろ死するゑ臨みて此機密を受け潔白の者となりて審判ゑ出づるを可なりと思惟せり。コンスタンティン帝ハ祈禱痛悔して聖洗を領け其後死するゑ至るまで領洗の時着せし白衣を脱せざりき。是等の事ハ「パスハ」祭后五旬節に至るの間に行ハれたる事ゑして大祭日ゑ至りコンスタンティンハ己の三子に其國を讓る事を遺言して崩御せり人民並ゑ軍人ハ誠心之を痛哭せり。人民ハ盛大なる儀式を以て其屍を送りコンスタンティノポルゑ送りコンスタンティンが曾て己の爲に墓を備へ

置きたる聖使徒の聖堂に之を葬れり教會ハ深く彼の基督教ヨ熱心盡力せし事を感銘し彼並ヨ其母聖后エレナに亞使徒の稱を冠し毎年六月二日ヨ之が記憶祭を執行す

第十一　コンスタンティンの諸皇子

聖アファナシイヨ對する再度の窘逐。　アファナシイ曠野ヨ隱遁する事

コンスタンティン帝は死ヨ臨みて漸く聖アファナシイを謫所より還す事を承諾せしが此事は偶々聖アファナシイがコンスタンティンの后嗣の時代ヨ正教の爲め多年相爭ふの發端となれり

コンスタンティンの死后其三子皇帝となり其他の諸皇子は其子と共ヨ殺害せられ僅ヨ幼年の甥ガール及びユリアンの二人のみ生存せり。長子コンスタンティンは其父の生前既ヨ管理せるガルリヤ(今の佛蘭西)貌利頗及び西班牙を領せしが其の王たる事久しからずして戰死せり

第二子コンスタンスは以太利及び亞弗利加を領せしが其兄の死せし后西方諸國を領せり。コンスタンスは常に正教を奉じ毅然としてアフアナシイを始めアリイ党を窘逐せらるゝの主教等を保護せり

第三子コンスタンチイは東部を領せしが恒に教會の事に關渉し神學上の爭論に立入りて絶えず教會に紛爭を釀さしめしを以て其名は最も多く當時の史上に顯はる。コンスタンチイは人となり柔弱なると共に性急殘酷にして常にアリイ派に心醉せる其左右の人々に制せられたり

曾てアフアナシイの管理せる教會は殆ど二年の間主教を置かず堅く正教を守り其の愛する牧師の窘逐に遇ふを見て益々深く之を愛するの情を起せしを以て今アフアナシイの歸るに及び喜んで嚴かに之を受けたり。アリイ黨は固よりアフアナシイの歸るを見て憤懣忍ぶ能はざる全く

之を斥けんとして有らゆる手段を盡し遂にアンティオヒヤに會議を設けてアフアナシイを罪に定め其位を剝ぎアレキサンドリヤには新にアリイ派の主教グリゴリイを遣せり。然るにアレキサンドリヤの教會は深くアフアナシイを愛し且つ不法の公會にて古來の選擧權を蹂躙せられたるを憤慨し斷然グリゴリイを退けたり。是に於てアリイ黨い威力を以てグリゴリイを立てんと決議し大齋期にグリゴリイをしてアレキサンドリヤに至らしめたり。時に埃及の大守い正教徒が飽までも己の主教アフアナシイを保護せんとするの決心あるを見異教人並に猶太人の力を假りて正教徒を放逐し修道士並に主教に献せられたるの處女に侮辱を加へてグリゴリイを教會に入れたり。此時一聖堂の如きい全く暴掠せられて正教徒い拷問に處せられたり。アフアナシイい己のアレキサンドリヤに居るに由りて徒に其敵の怒を激し己を愛する信徒の

危難に遭遇せんとするを見て密にアレキサンドリヤを避けんと決心せり。當時東方ニ於てハアリイ黨の勢力盛んなるも西方にハ其勢力微微たりしを以てアフアナシイハ西に赴きて保護を求めんと決心し遂ニ去りて羅馬ニ至り三年の間此ニ居れり、時ニ羅馬の「パパ」ユリイハ公會を召集して公然アフアナシイを其位ニ恢復せり

西方の皇帝コンスタンスハアフアナシイを辨護しコンスタンチイハアフアナシイを其位に恢復すべきを促し若し拒まバ兵力を以て信徒ニ欽慕せらるゝの牧師を其位に恢復すべしと威嚇せり。時ニアリイ派の主教グリゴリイ死せしかバアフアナシイハ漸くアレキサンドリヤニ歸るを得たり。アレキサンドリヤの人民ハ歡呼して七年の餘毅然として流竄の苦辛を忍びたる牧師を迎ひ其狀恰も凱旋者を迎ふるが如くなりき(是れ實ニ三百四十六年なり)アフアナシイハアンティオヒヤに至りて皇

帝ニ謁見せしニコンスタンチイ之を優待しけれバ反對党ハ一時喫驚せり。アリイ黨の領袖輩ハコンスタンスを恐るゝよりして從來の擧動を改め曾て辨護せし所の說を撤斥するニ至れり。

然れども アフアナシイの此勝利ハ久しきを保たざりき。三百五十年ニ正教の保護者コンスタンスハマグヂンチイ帝と戰ひて死しマグヂンチイ其國を領せしが後ち幾何もなくコンスタンチイハ軍を出してマグヂンチイを滅し全帝國の獨裁君主となりしかバアリイ黨ハ決然アフアナシイニ反對せり。コンスタンチイは此時ニ至るまでコンスタンスを恐るゝより本意ニ反き僞りてアフアナシイを優待せしが故に之を惡むの念殊ニ熾んなりき。故ニ獨裁君主となるや直ニ三百五十五年ミランに公會を召集せしが此公會ニ於てアフアナシイニ對する告訴の曲直は已に之を審査せず直ニ之を罪ニ定め西方の主教等に命じて東方主教

等の宣告したる罪定を採用せしめ之を諾せざる者は皆流罪に處せり此時は西方羅馬府にもアリイ黨は勢力を得て曾て正教を確守せるが爲め流竄に処せられたる羅馬の主教も此窘逐に反抗する能わず遂に二ケヤの信經を斥くる事に署名せり。斯の如く宗教幷に良心に關するの事に於ては皆皇帝の命に服從せざるものなきを以て不屈不撓正教を確守せる主教アファナシイは頗る其の惡む所となれり。アファナシイはアレキサンドリヤ教會の基督教徒に堅く正教を守り全能の神の佑助を恃みて屈すべからざるを勸め泰然として其教會を治理しければ皇帝は一大果斷を行ふべき命を下せり。勅使アレキサンドリヤに至りてアファナシイに教會を去るべきを命じたるも皇帝より遣はされたるの命令書を示さゝりければアファナシイは曾てコンスタンチイ帝が兄コンスタンスを恐るゝ時アファナシイの一生涯アレキサンドリヤに居らし

むべき事を確めたるの書數通を所持せしを以て今皇帝より書を以て命令せらるゝに非ざれば教會を去る能わぬと確答し全都の人心恟々たりき

一日主教アファナシイは徹夜の祈禱を行ひしに深更に及び兵器を帶たる兵士五千人はせ來りて人民の充滿せる聖堂を圍みたり。アファナシイは己を捕ふるに來れるを知るも自若として聖所に立ち補祭に命じて『主を讃め揚げよ彼は仁慈にして其憐れみは世々にあればなり』云々の百三十五の聖詠を讀ましめ民として之に和すると同時に家に歸る事を命じたるに民はアファナシイを捨てゝ去るを欲せざりき。兵士は聖堂に闖入して祈禱せし者を毆打し聖堂を掠め混雜甚しかりしが其間尙は彼の大なる奇蹟を行ひ有力の手を以てイズライリ人を埃及より引出し虐げらるゝ者を記憶し之を敵の手より救脫する主の仁慈の無窮なるを